



旧ソビエト戦車—T72 M1

1991年12月21日、ソヴィエト社会主義共和国連邦（ソ連）は崩壊した。これは世界の冷戦の終焉であり、新たなデタント（緊張緩和）の始まりである。

しかし、巨大な軍事国家、それも巨大な産軍複合体であり官僚国家であったソ連は、本当に終焉を迎えたのであろうか。これまでの情報では、素直にこれを肯定することは出来ない。なぜなら、ソ連を受継いだC I S（独立国家共同体）は膨大な数の核兵器と通常兵器を保有するばかりか、アメリカと共に世界屈指の武器輸出国であることが、今でもなお新デタント世界に暗い影を落としているからである。

C I Sは大胆な軍事予算の削減と国家としての戦略的不統一はあるにせよ、地上軍は強力である。その主力は戦術ミサイル部隊と戦車部隊であり、戦車の主力はT-72である。

T-72は湾岸戦争ではイラク軍の主力戦車であった関係から、とかく風評があるが、戦車そのものを直視すれば、それは極めて優秀な戦車であることが判る。それも、かつての傑作戦車、T-34の流れを汲む正統派のソ連軍現代戦車である。

そこで、このT-72の正体を、その直前に開発を開始していたT-64と比べながら、その誕生から振り返ってみよう。

T-34、T-55それにT-62と続いたソ連軍の主力戦車は、大口径砲、低姿勢、重装甲それに機動性といったソ連軍戦車の伝統を受け継ぐものであった。だが、こうしたソ連軍戦車の将来にも泣き所があったのだ。それは自慢の機動性であった。ソ連軍戦車用エンジンの開発が新戦車の重量に伴わなかったのである。T-34/76が装備したV2ディーゼル・エンジンは500馬力の優秀なものであったが、T-62が搭載した改良型のV12型エンジンは580馬力に過ぎなかった。この過程をエンジンの出力重量比（エンジンの馬力／総重量）でみれば、T-34/76は16.2、それにT-62は14.5となり、ソ連軍自慢の機動性は戦車の重装甲化と共に、将来、確実に低下することを示していたのである。

1960年初頭、ソ連軍がT-62に代わる新戦車を開発する際、125mm大口径滑腔砲の導入と共に、新エンジンの開発が最大の課題となった。そこで、ソ連軍は次期主力戦車のエンジン等に思い切った新設計を導入したのである。この試作型は、後にT-64と呼ばれる戦車となる。又、慎重を期したソ連軍首脳部は、この新設計の戦車と平行して、従来方式の規範に基づく新戦車の開発も決定したのである。この新戦車がT-72戦車となるのであった。

T-64のためのエンジン開発を担当した設計事務所は、独創よりもモデルになるエンジンを世界各国のエンジンの中から選定することから始めた。当時、彼等が注目していたのが

だったのだ。高出力を望む事務所にとっては致命的な選択となった。彼等が開発したこのコピーの5 T D Fディーゼル・エンジンではデータブックには出力750馬力とあるが、実際にそこまで出るとどうかは疑問である。その上、このエンジンは本家のイギリスと同様に故障が頻発し、不慣れたためもあって、そのメンテナンスにてこずった。又、試作車には良くあることだが、新設計のトランス・ミッションでも同じことが起きていたのである。

T-64の走行装置にも、新たな試みを採用した。それまでの主力戦車には無かった4個の上部小転輪を取り付けたのである。又、大転輪もスチール・リムのサイレント・ブロック転輪となった。履帯も西欧で標準とされたダブルピン・ワンブロックを採用した。

一方、T-72の設計担当のモロゾフ設計事務所は、当時、改良が進行中の熟知したV12型の改良型ディーゼル・エンジン（W-46）を搭載することを決めた。また、走行装置では、従来のゴムリム・アルミ製大転輪と、シングルピン・ワンブロック履帯を踏襲し、新たに3個の上部小転輪を装備したのである。

これまで見たように両戦車の主な差異は理解できた。これを端的に言えば、T-64は従来の設計の基本を脱して西欧の戦車への接近を狙った斬新なものであり、T-72は、あくまでもソ連戦車の伝統を踏襲した実践型の戦車であった。

この他、弾薬の自動装填装置と砲の照準方式を除き、滑腔砲等その他の点では両戦車に大きな相違はない。従って、これからは主にT-72（M型）について詳述しよう。

乗員と諸元：乗員は車長、操縦手および砲手の3名。装填手は砲弾の自動装填装置を搭載したため不要となった。

戦闘重量は41トン。全長（主砲を含む）：9530mm、車体のみ6860mm。全幅：3460mm。全高（砲塔上面）：2190mmである。

砲塔と武装：砲塔は、装甲と主砲口径のアップにもかかわらず、T-62と比べて更に小さくなり、車長用展望塔は主砲の右、砲手用ハッチは左とレイアウトが変わった。又、暗視用の赤外線ライトが増備されている。

主砲は125mm半自動閉鎖機、弾薬自動装填の滑腔砲を搭載している。砲身は常時、歪み防止用のサーマル・スリーブ（熱遮蔽）で掩われている。この砲はベトロフ設計事務所により設計され5 A 46型と呼ばれた。

主砲弾は弾と薬筒との分離弾を使用している。その種類は次の通り。

H E F R A G（高性能榴弾）最大射程：標準薬筒で5000m、特殊薬筒で9400mである。H E A T T（高性能対戦車弾）最大射程：4000m。A P F S D S（装弾頭徹甲弾）最大射程：4000mである。

しかし、これらの砲弾と薬筒を別々に装填する電動弾薬自動装填装置は、かなり複雑な操作を行なうことになる。それも、砲弾と薬筒が砲塔戦闘室の床下部に同心円状にそれぞれ収納されている所から、特殊なアームで選

又、射撃速度は8発／分であるという。副武装としては、車長用キューボラの回転展望塔に12.7mm対空用機銃（NSVT-12.7）を、更に主砲との同軸に7.62mm機銃（P T K）を1門ずつ装備している。

照準器と監視装置：砲手用の照準装置は、当初からレーザー照準器（T P D-K-1 M）照準範囲500～3000mを装備。夜間用は赤外線暗視窓（T P N-1-49-23）である。車長用ではキューボラの回転展望塔に2個の前方昼間用光学監視窓（T N P-160）と夜間用には1個の赤外線暗視窓（T K N-3）を、又、操縦手用は赤外線暗視ペリスコープ（T P N O-168 V）を装備している。

T-72はシュノーケル・パイプを着着することで、5 mの深さまで潜水走行することが可能である。パイプは砲塔上面の砲手用ハッチに取付けられる。操縦手用の昼間用視界窓には、2個の光学ペリスコープ（T N P A-65）の他、潜水の際のジャイロ・コンパス（G P K-59）が装備されている。

エンジン：エンジンはT-34用のV-2型エンジンの継承、V-46-6型、多種燃料ディーゼル・エンジンである。これはハリコフ動力工場の設計事務所により、主に従来のV-54型にスーパー・チャージャーを取付けて出力をアップさせたものである。データブックには出力は780馬力であり、出力重量比は19となる。これが事実ならば立派なものである。ただ、このエンジンの平均寿命は500時間である。ソ連製エンジンは比較的短寿命だが、設計の改良は限度に達しているであろう。

道路上での最大速度は60km/h、平均速度は路上で50km/h、不整地で35～45km/hである。又、燃料の搭載量は1200リッターで補助ドラム2個を付けると1590リッターである。この際の最大航続距離は道路の状況により420～600kmである。

車体と走行装置：ソ連戦車伝統の低いシルエットは完全に継承されている。圧延鋼板を溶接した車体の単純な工法は、T-34当時の手法と全く違ってはいない。前面装甲にはV字形の水切りと小口径砲の反跳弾防止用のリブが操縦手用窓の前に設けられている。又、車体側面にはゴム製のスカートが、巧く重ね合わされながら装着されている。H E A T弾の防御用である。それに前面車体下部には、新たに戦車自ら防御トレンチを15～40分程度で掘削できるように、ドーザー・ブレードが装備されている。これは追加装甲板の役目も果たしているのである。

装甲は車体前面上部で200mm（21度）、下部で100mm（30度）、車体側面で60mm（90度）、上面が15mm（0度）、他方、砲塔正面の装甲は250mm（80～85度）、側面が120mm（70～85度）それに上部が30～60mm（0～30度）といわれている。

サスペンションはトーションバー方式で、上部小転輪を持つヴィッカーズ（ライブ）式緊張履帯である。大転輪は8本又は6本のスポーク・アルミ製ゴムタイヤ・リム付きで、第一、第二および第六のダブル転輪のアーム

年となる。しかし、国家の儀式パレードで一般大衆の面前に姿を現したのはT-72の方が早く1977年11月である。他方、T-64は全く姿を見せず、初登場は1985年であった。

当時は、ソ連の新戦車出現とさまざまな憶測を呼んだが、現在ではソ連のグラスノスチ（情報公開）と新デタントにより、その実像が判ってきた。それによれば、T-64はこれまで、ソ連は輸出したことが無いのだ。生産されたT-64は全てソ連軍戦車連隊に支給されていたのである。理由は、極秘の新戦車だとか、失敗作だとか言われてきたが、結局は前述のとおり、野心的な試作戦車であり、就役状況を充分調査出来る自軍の部隊に配備したというのが正しいようだ。

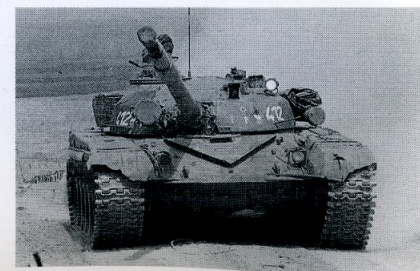
だが、試作戦車が、なぜ大量に生産されたのかという疑問がこのころ。それは、かつてのソ連の国家体質を知れば良く理解できる。

戦車設計事務所の背後には、上はソ連軍戦略本部から、戦車部隊の将官達、更に党本部にまで繋がっていた。又、生産部門では、これも組立工場から部品工場まで膨大な組織が組み込まれていた。従って、国家戦略に係わる新戦車開発の失敗により、幹部の更迭や組織に混乱を起こすことは許されなかったのだ。彼等にとっては、数百台の戦車の余分な生産などは大きな問題では無かった。それよりも組織の安泰と戦車の数を揃えることの方が遥かに重大だったのだ。これが巨大なソ連産軍複合体官僚国家の実体だったのである。

その後、ソ連はT-64に代わる新世代の戦車を開発した。アメリカのM1戦車と同様にガスタービン・エンジンを搭載したT-80である。しかし、T-80の評価と、この戦車が彼等の真の主力戦車に成長するかどうかはもうしばらく時間が必要であろう。

T-72は、現在、かつてのワルシャワ条約機構傘下の諸国を始め、世界15ヵ国を超える国へ輸出され配備されている。C I Sでは、T-72は今後も主に輸出を目的として、更に低価格で性能が維持出来るよう改良され、生産は続けられるであろう。又、同戦車をライセンス生産しているチェコスロバキアやインドを含む4ヵ国では、C I S同様に生産が継続されるであろう。

T-72は、このように、かつてのソ連軍とその衛星諸国、そして現在のC I S軍の主力戦車の地位を占めているのである。



解説●菊地 晟
進行●田村広幸・見川裕幸

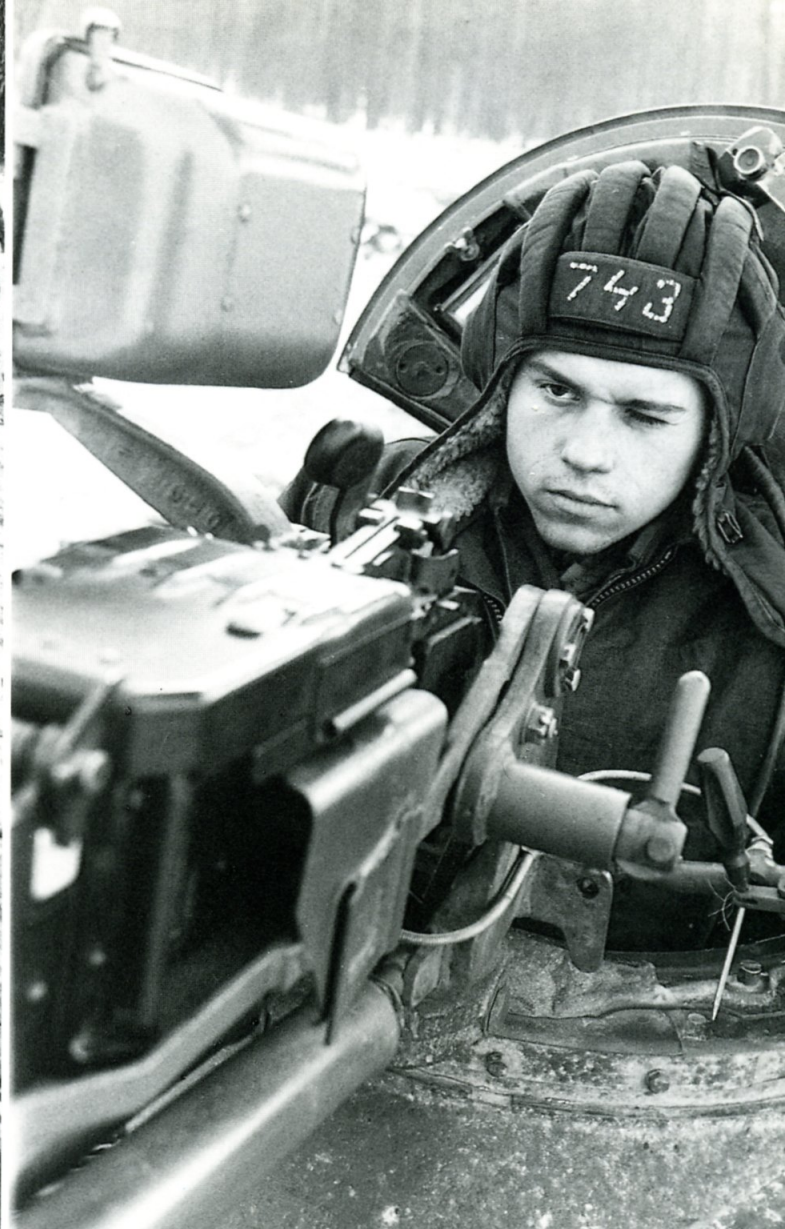


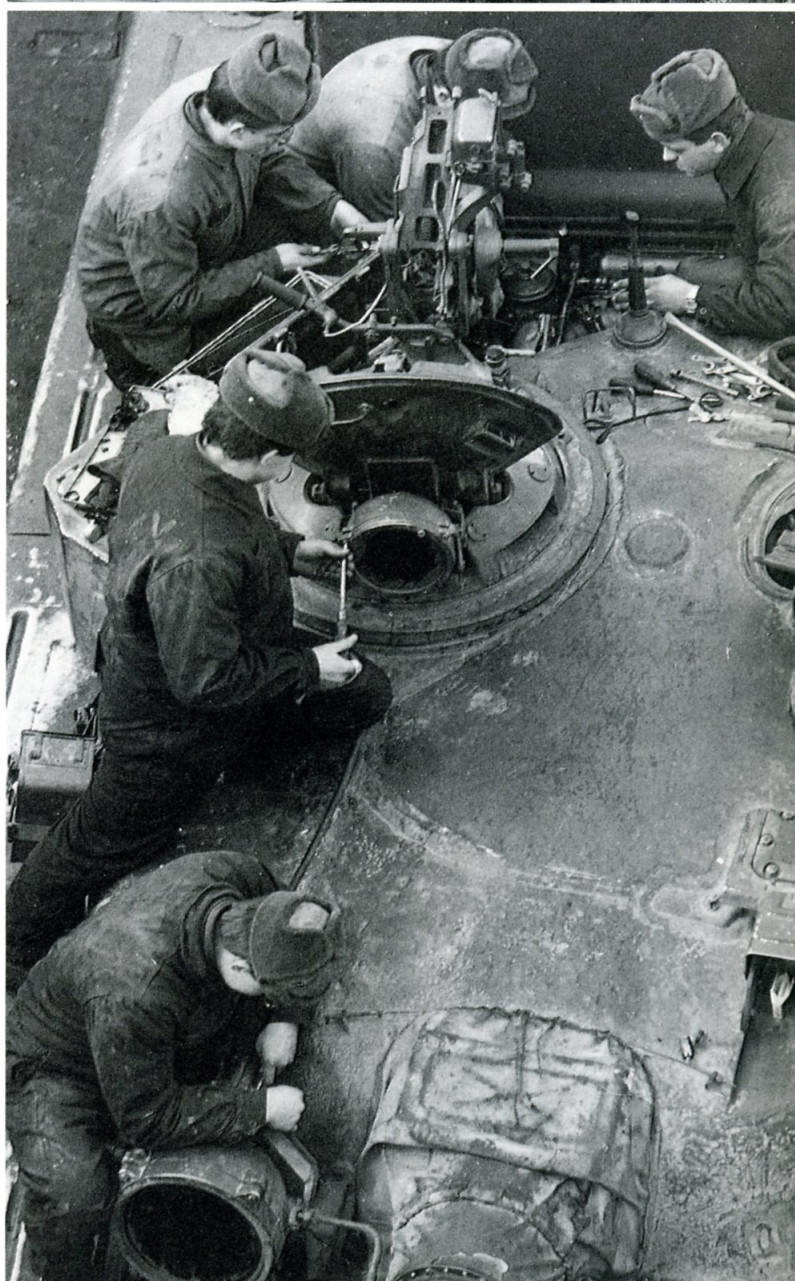
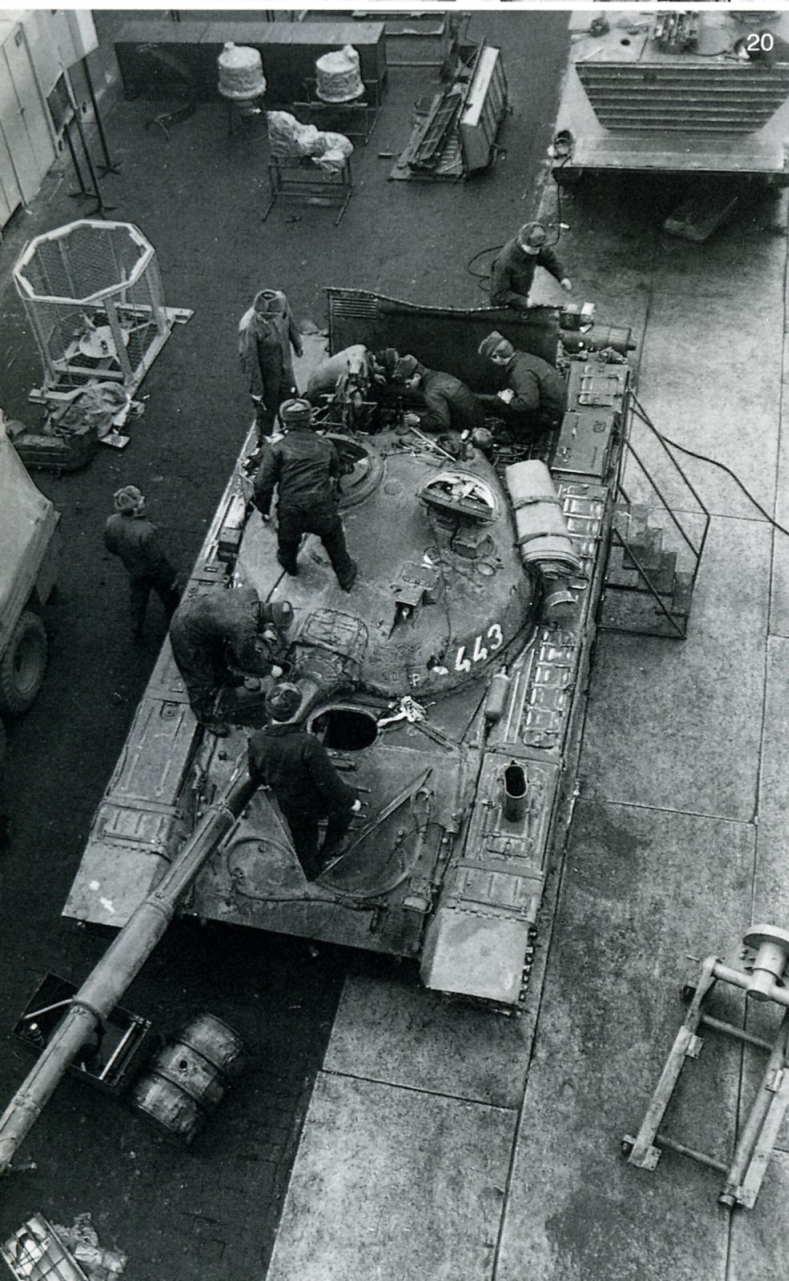
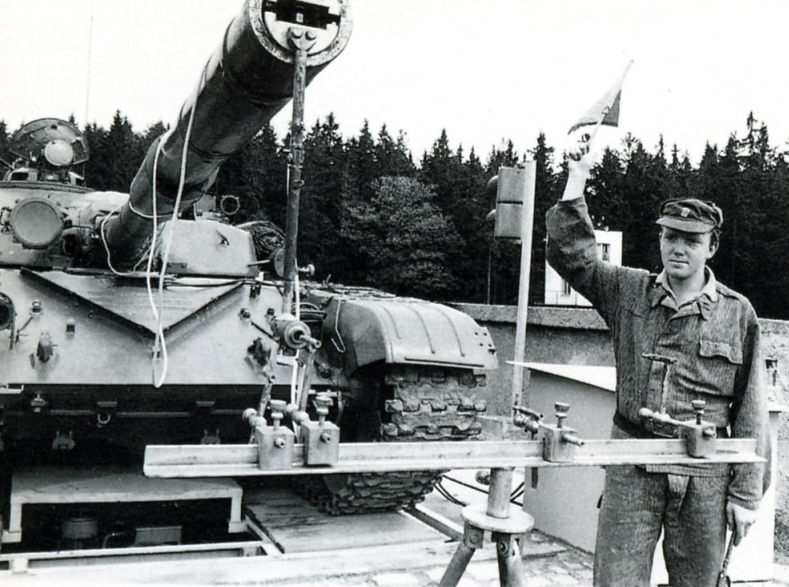


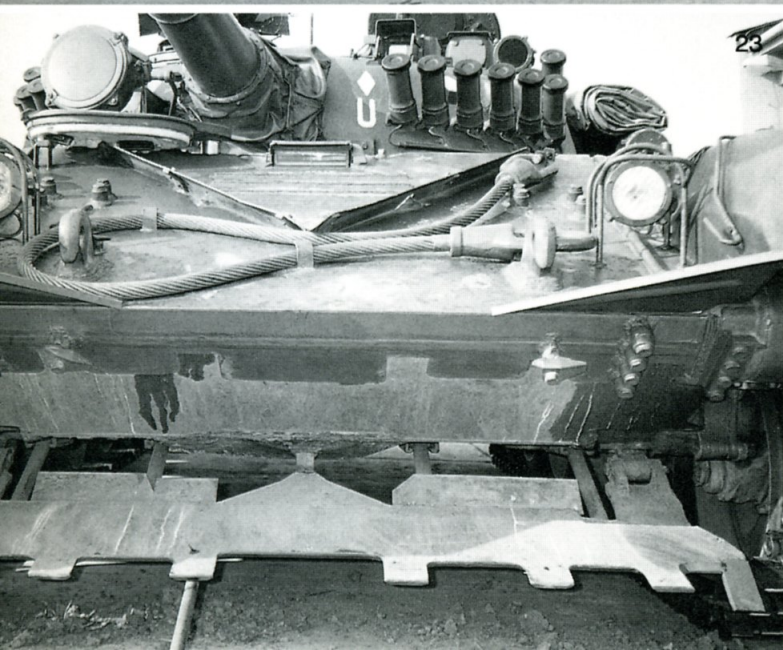
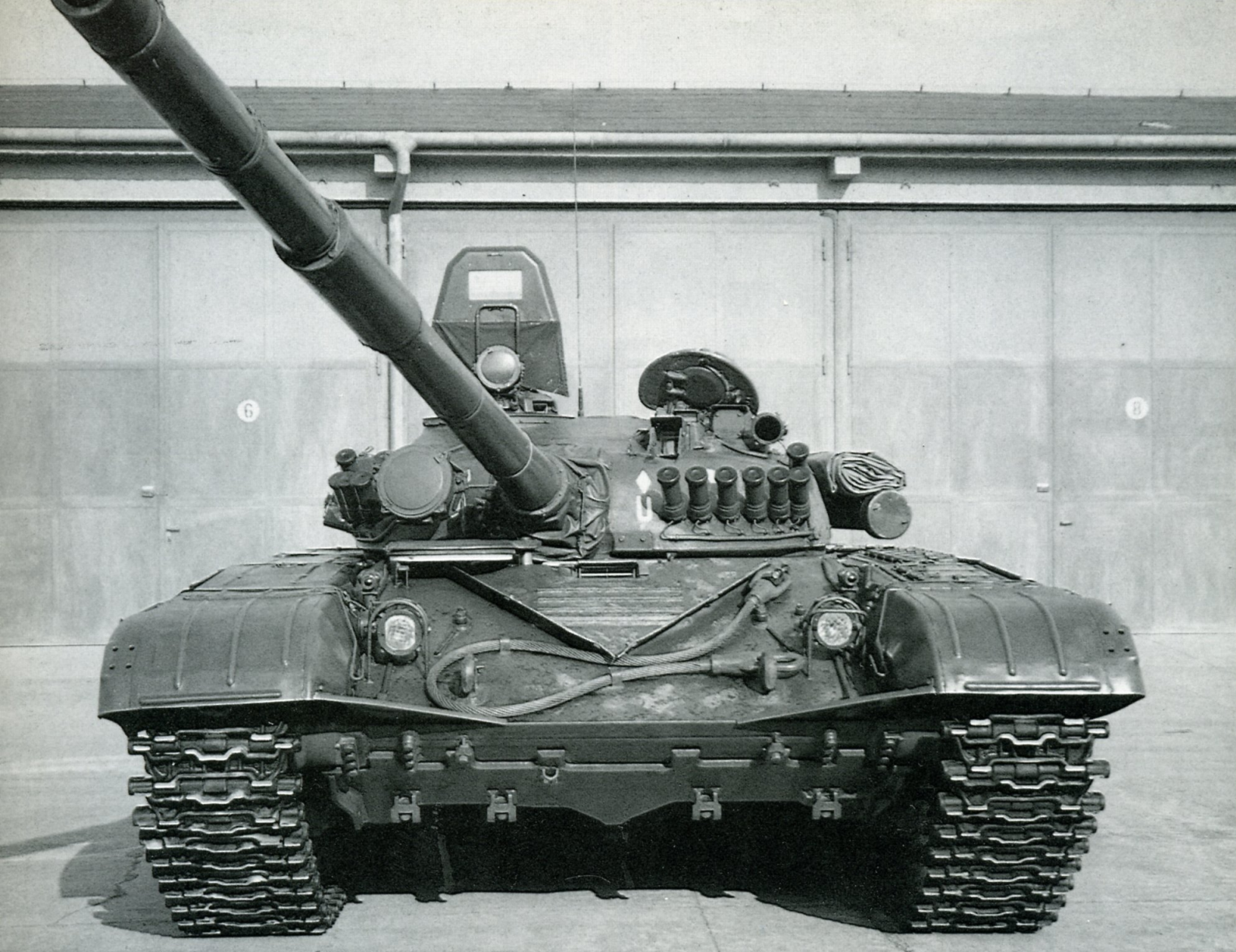


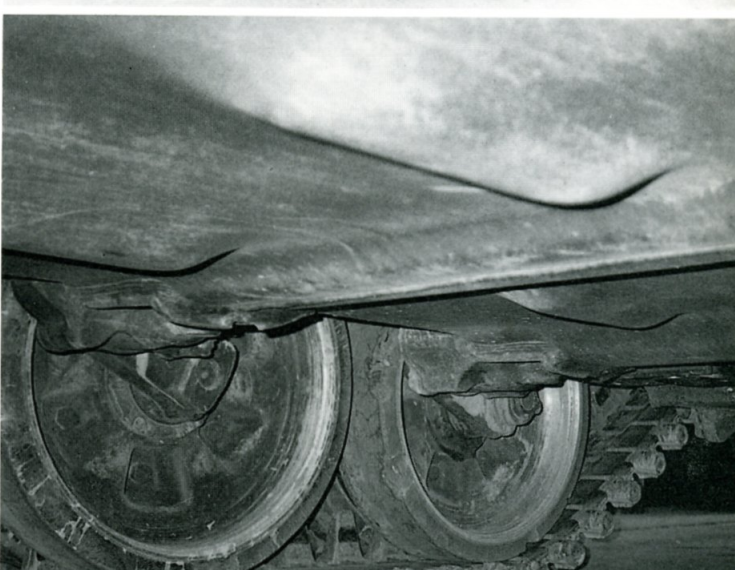
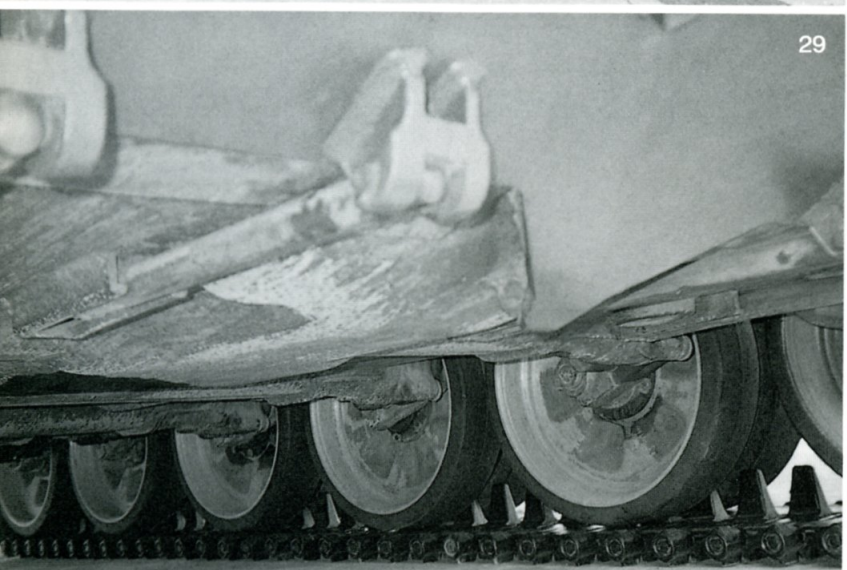
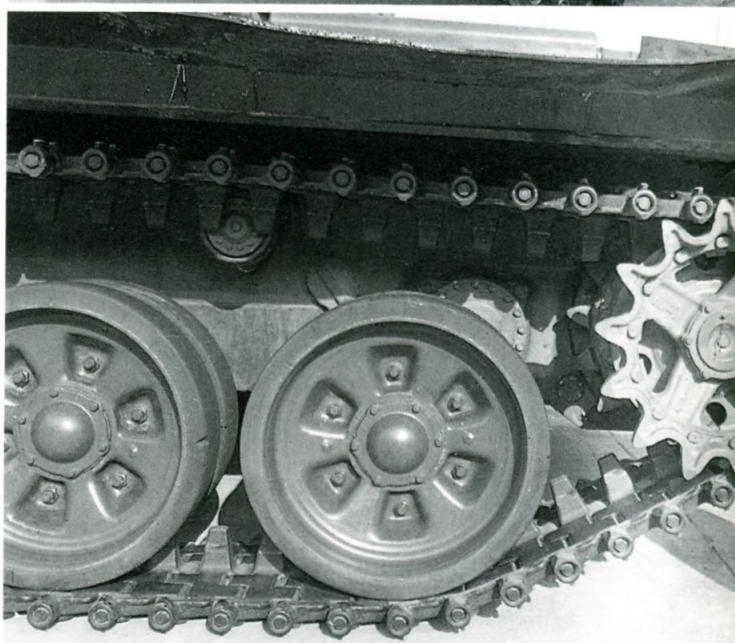
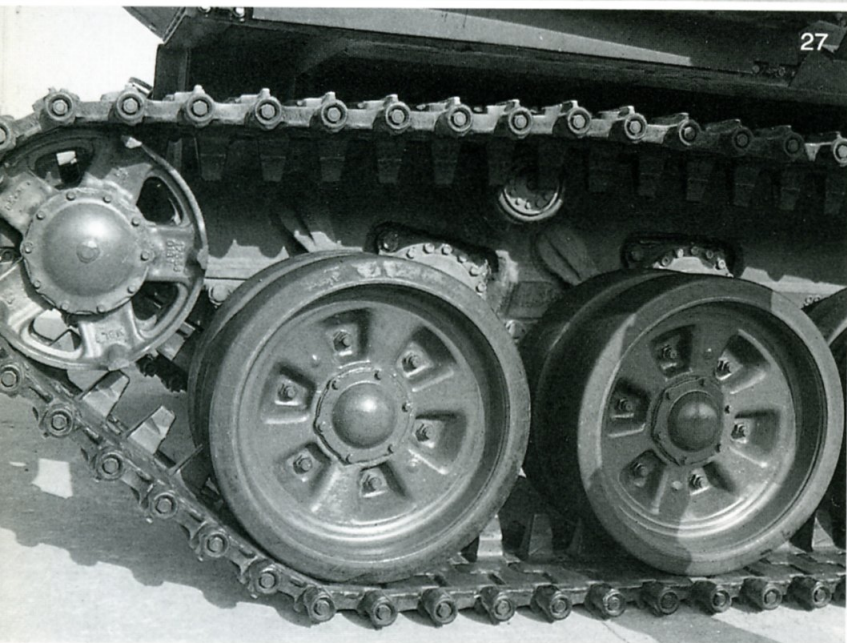
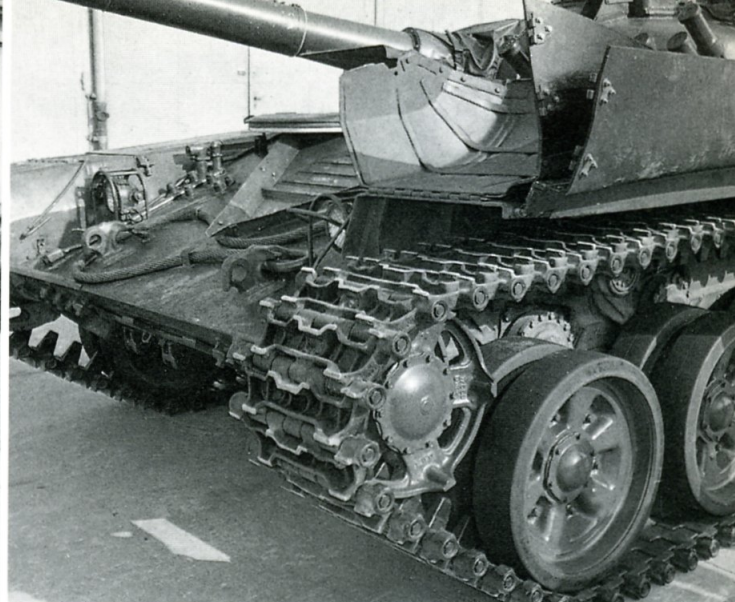
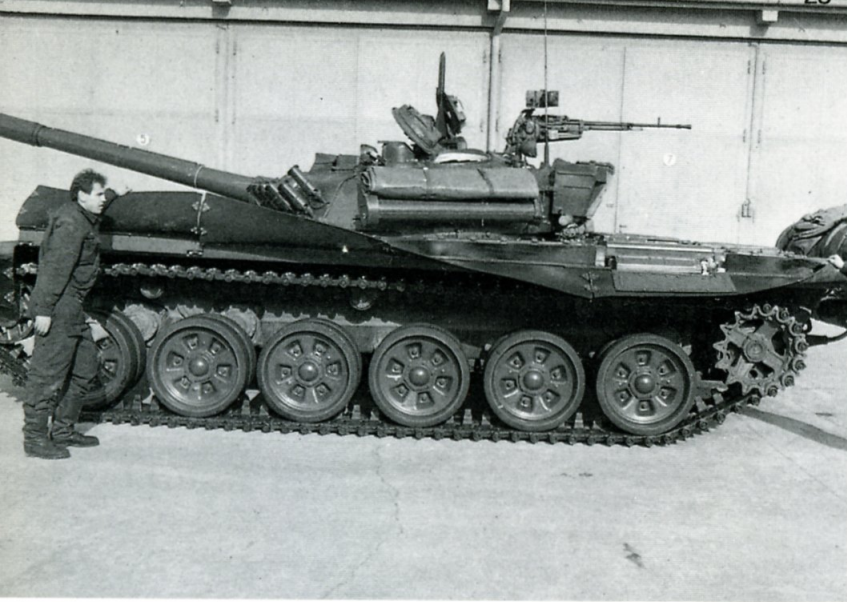
12

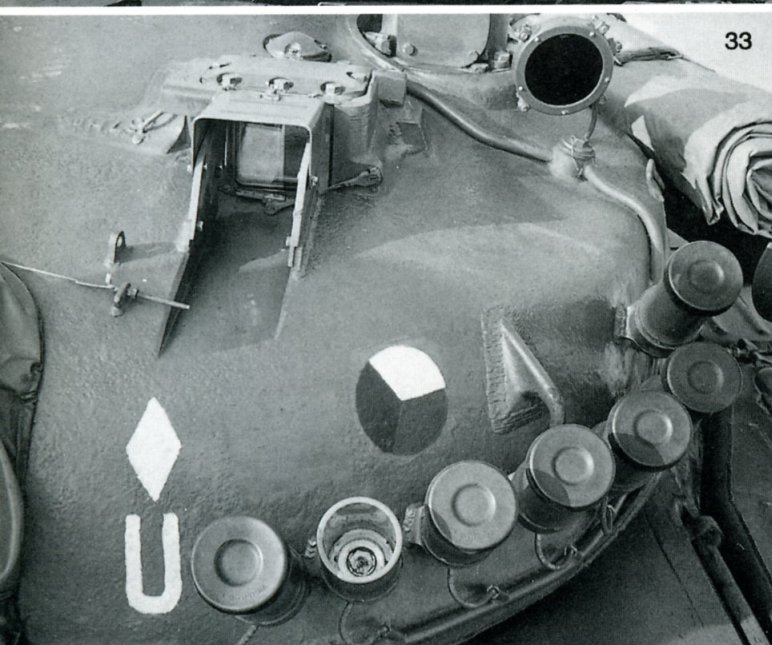
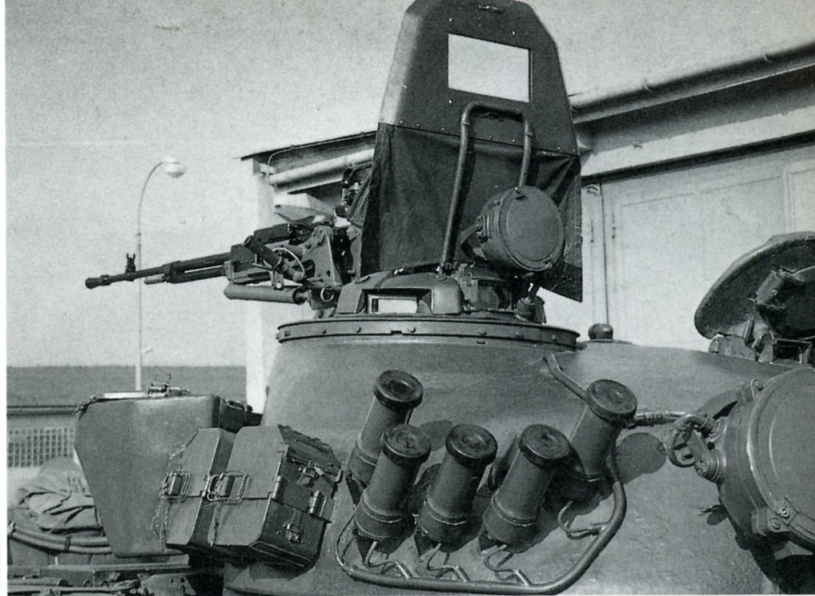
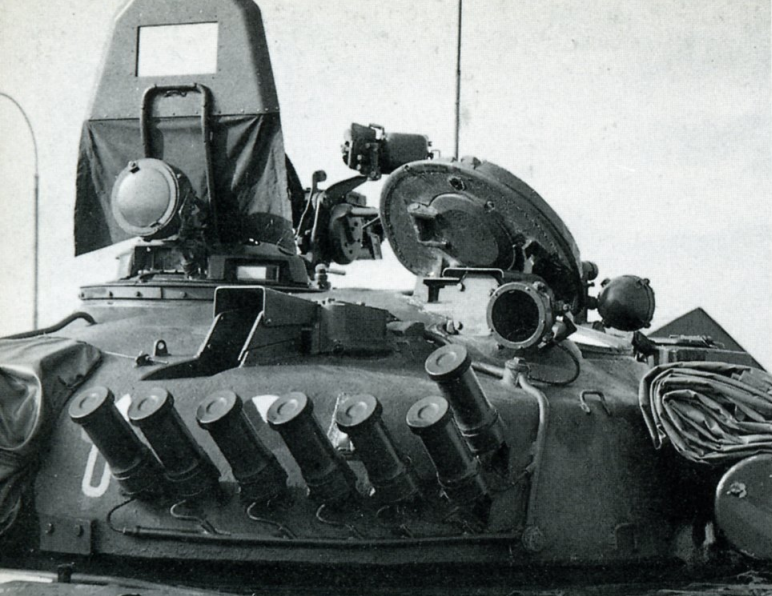




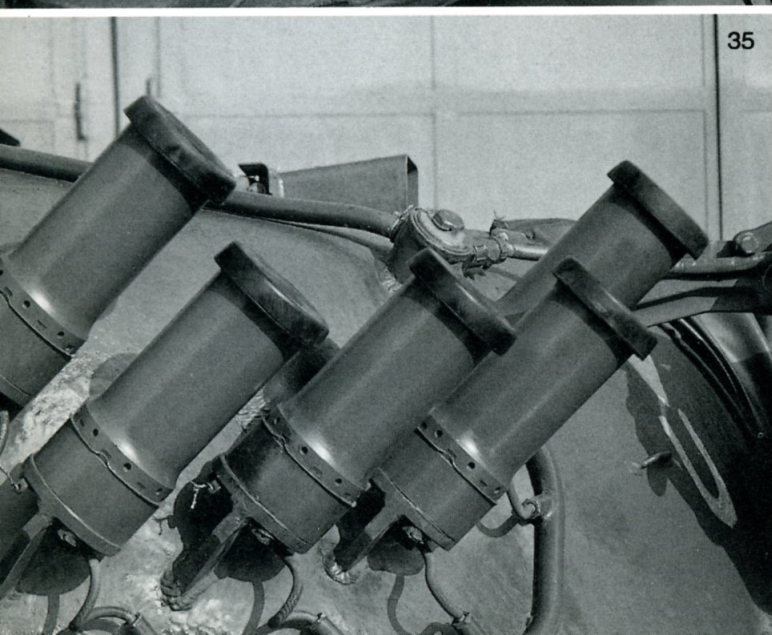
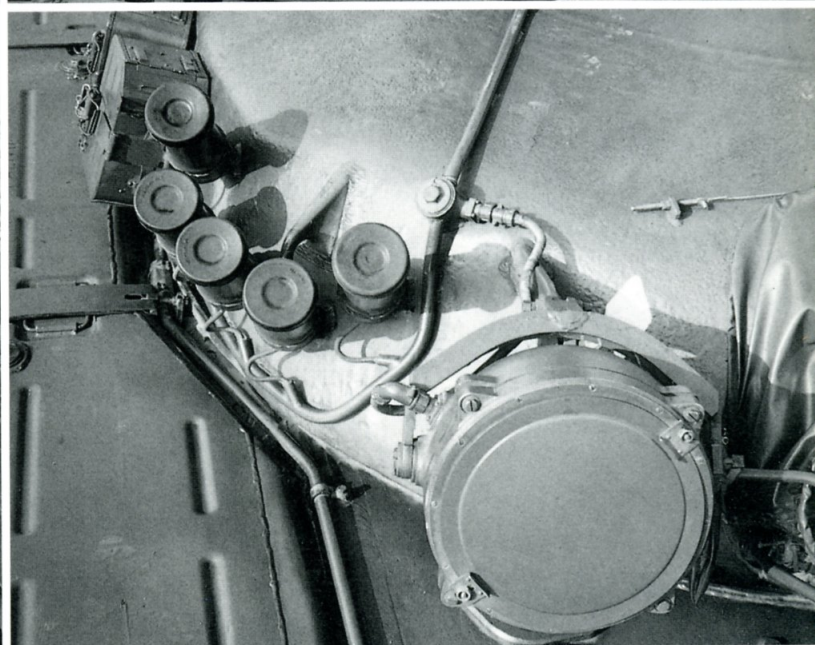




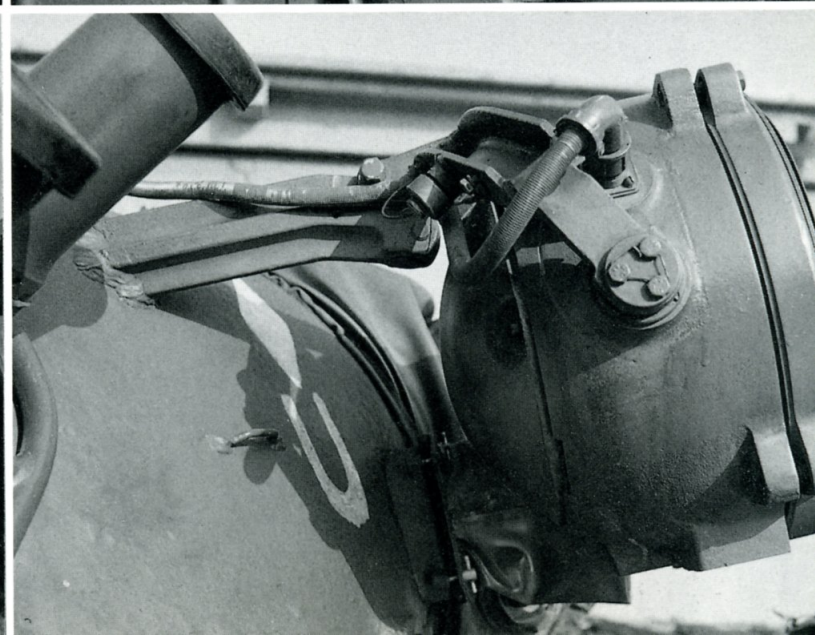


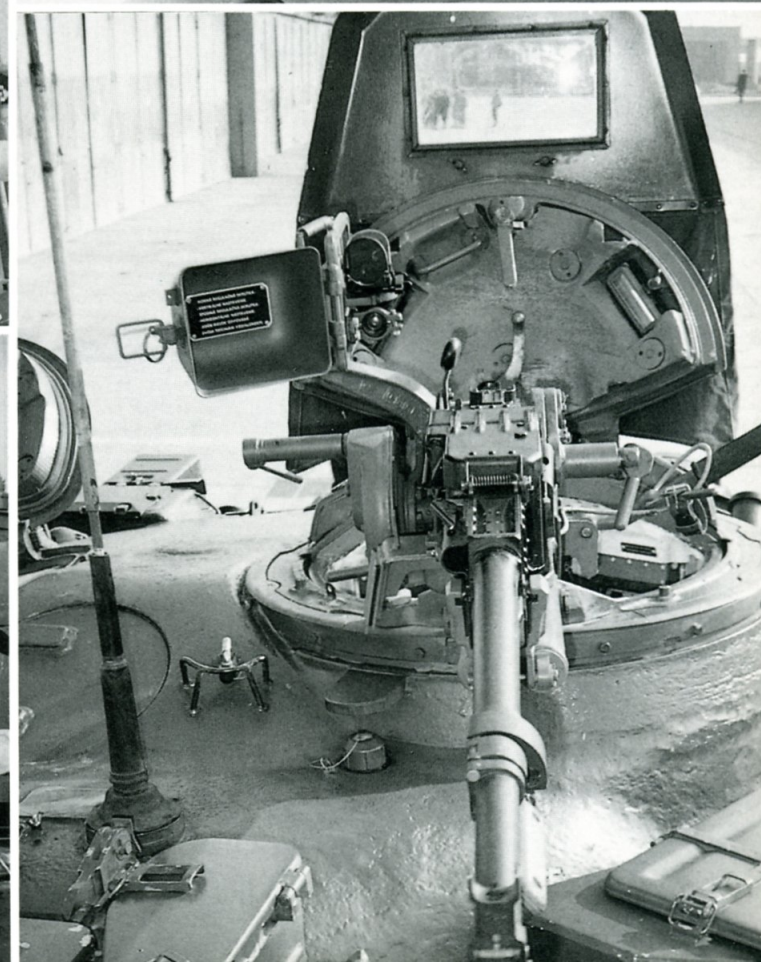
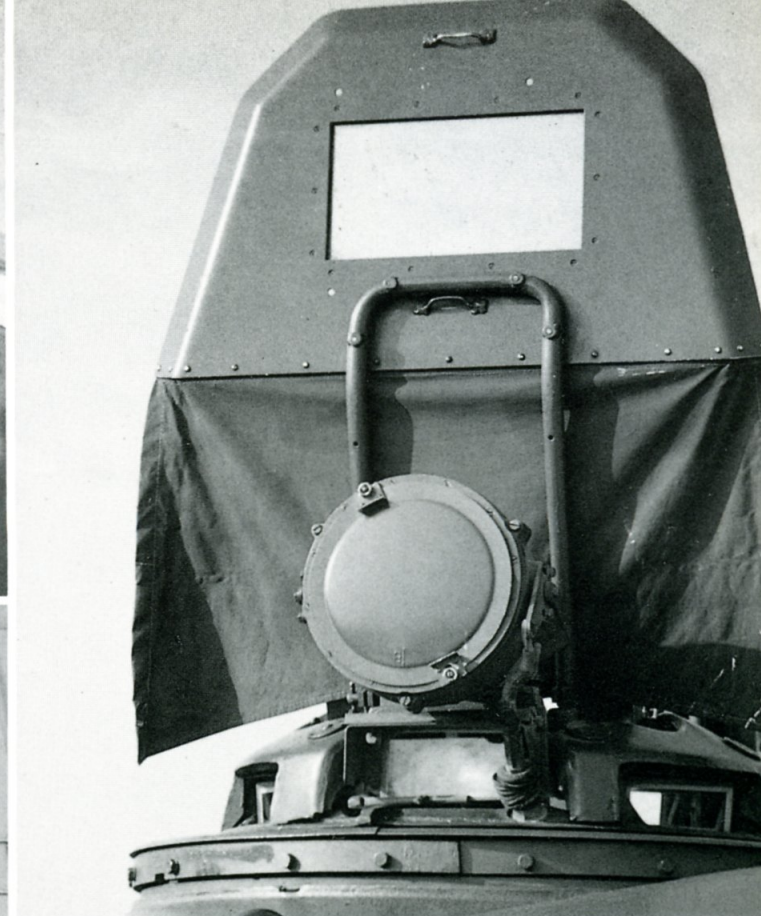
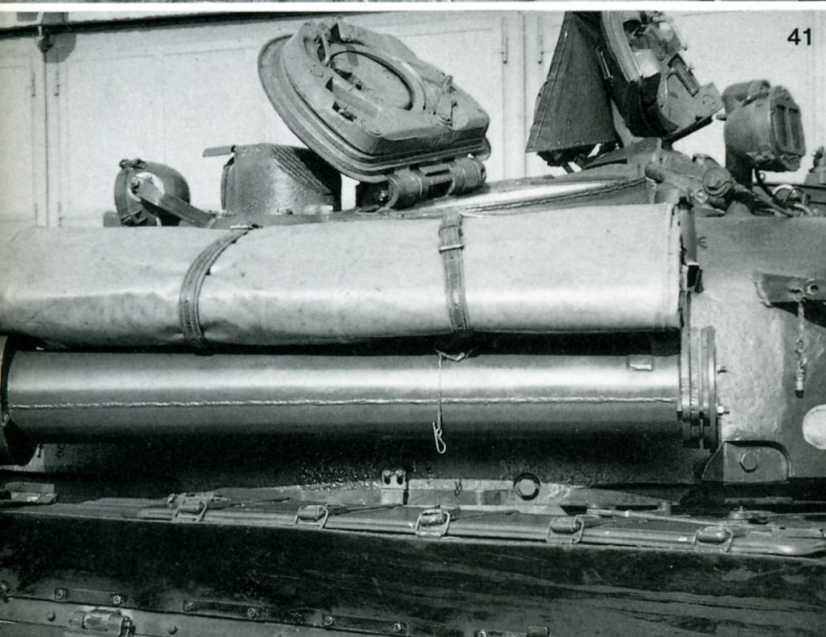
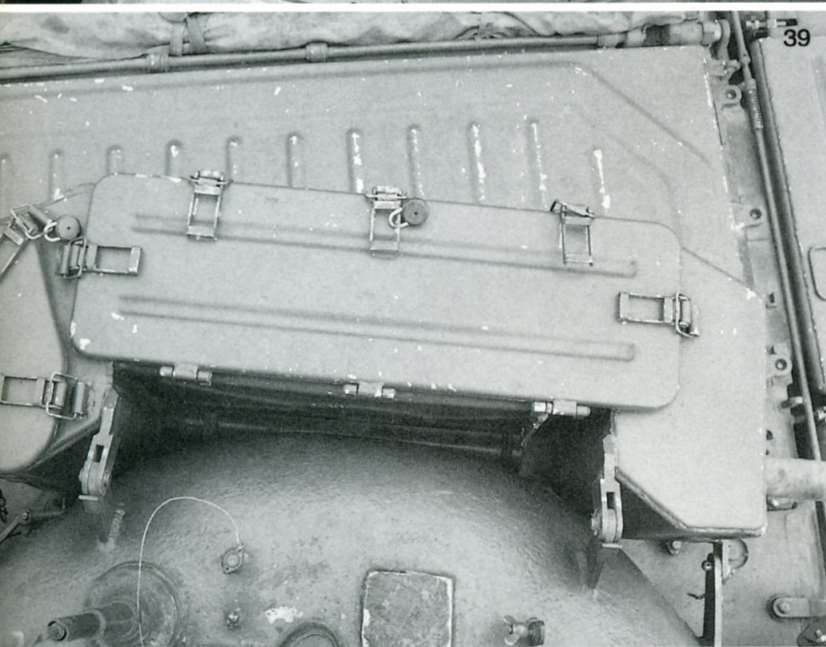
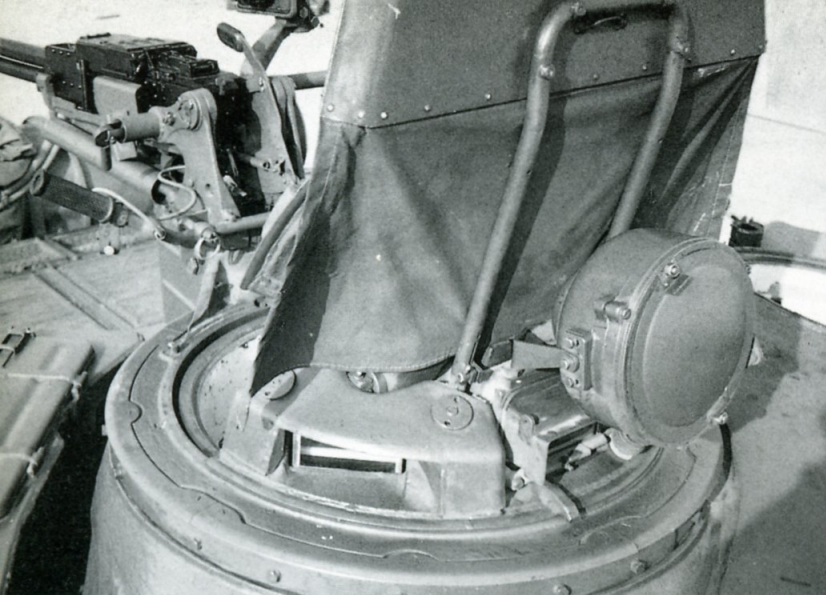


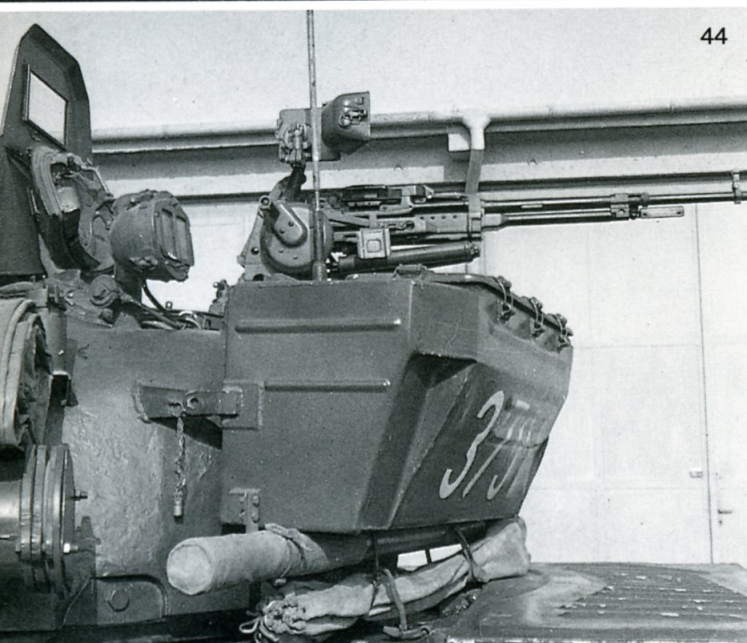
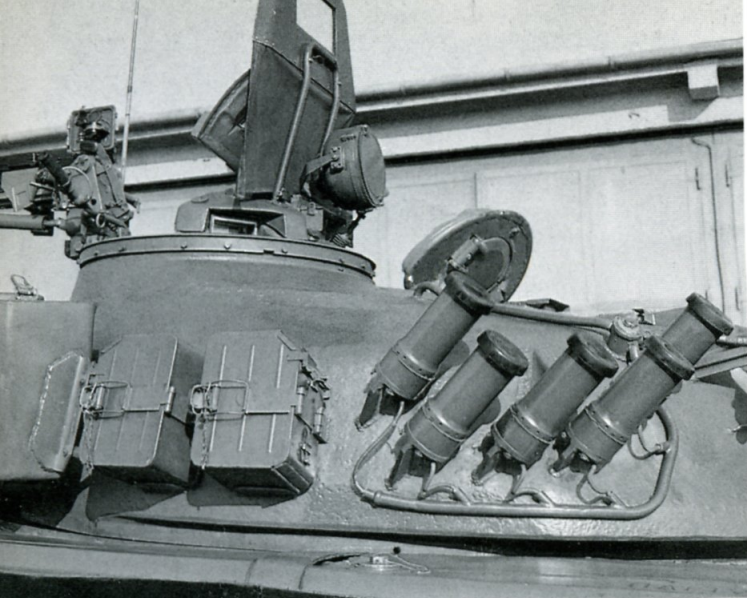
33



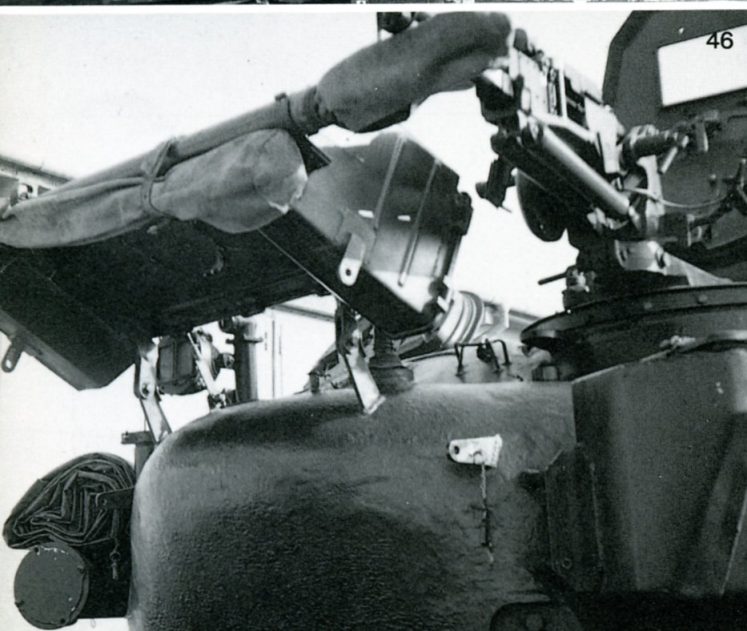
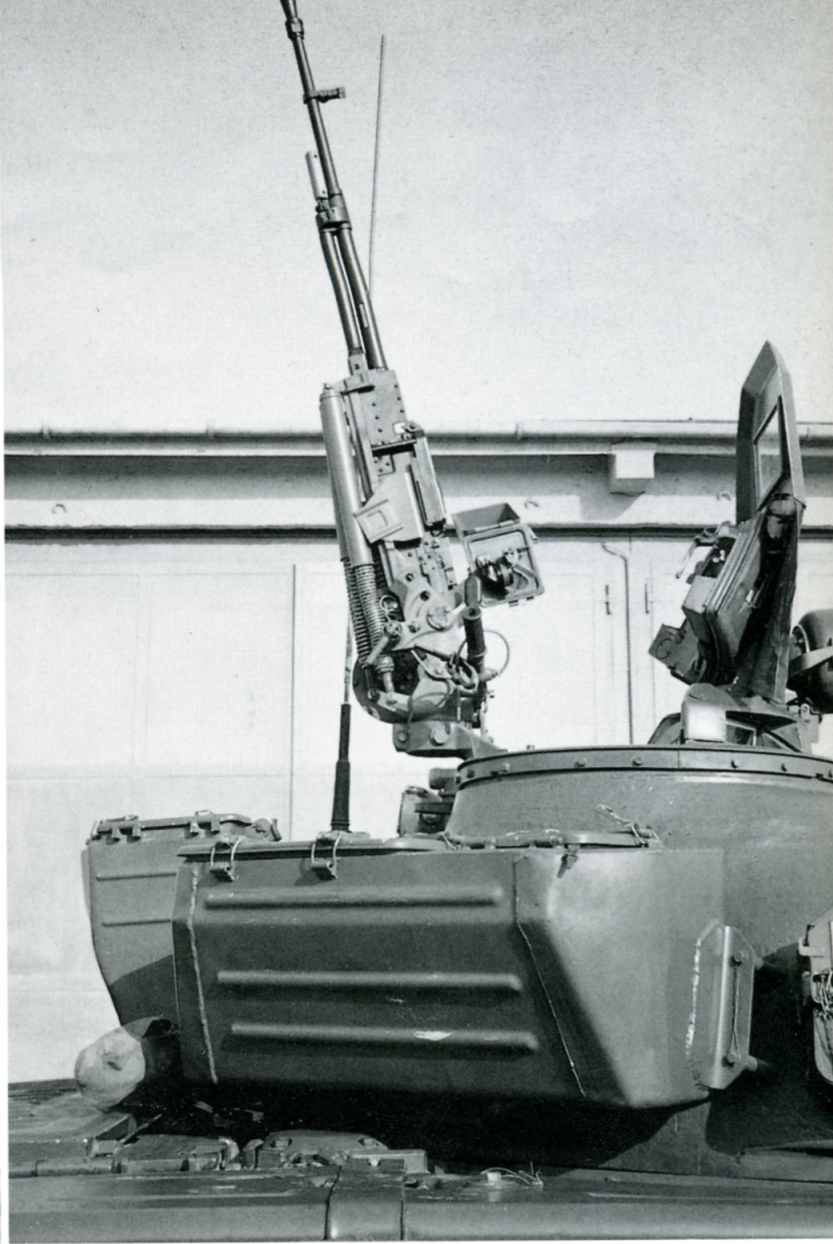
35



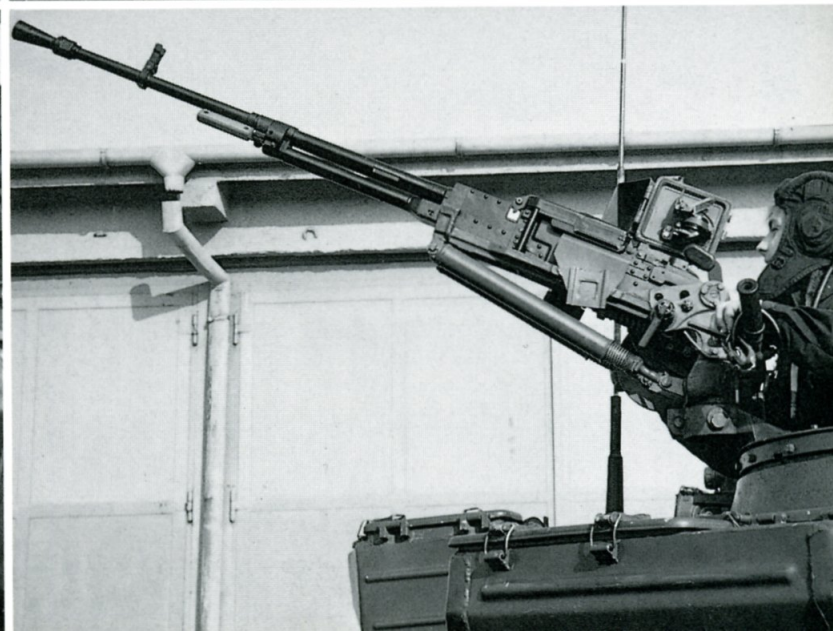


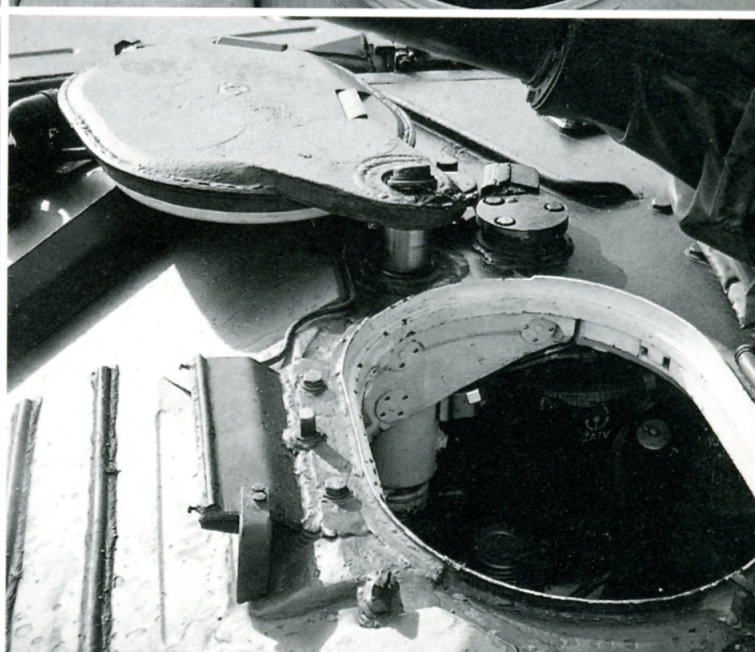
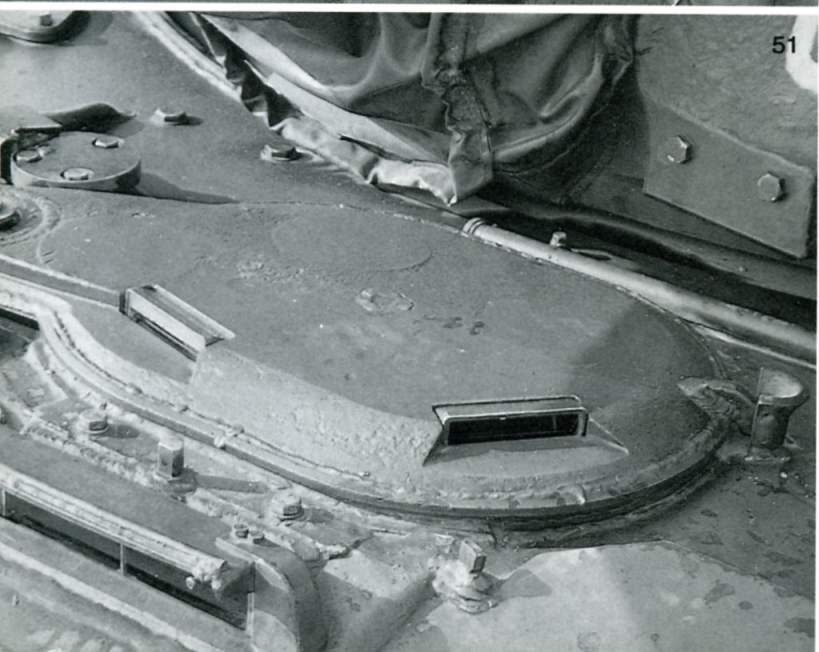
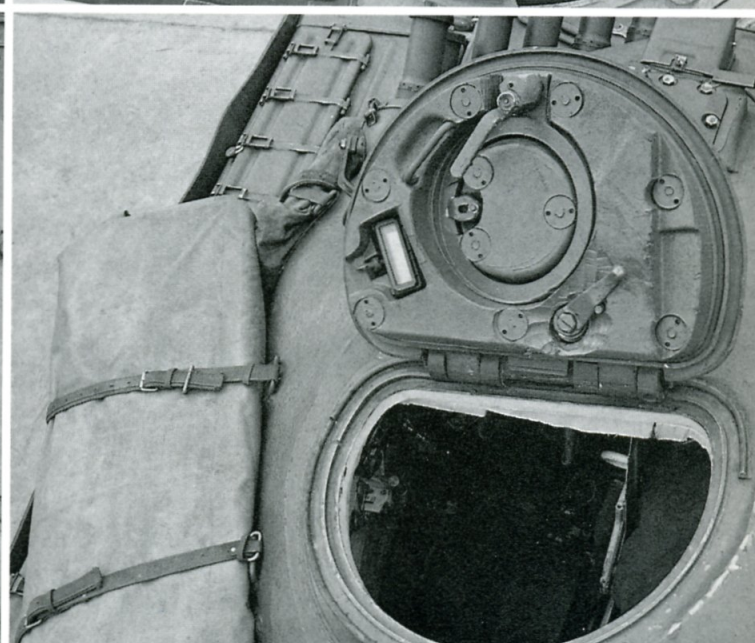
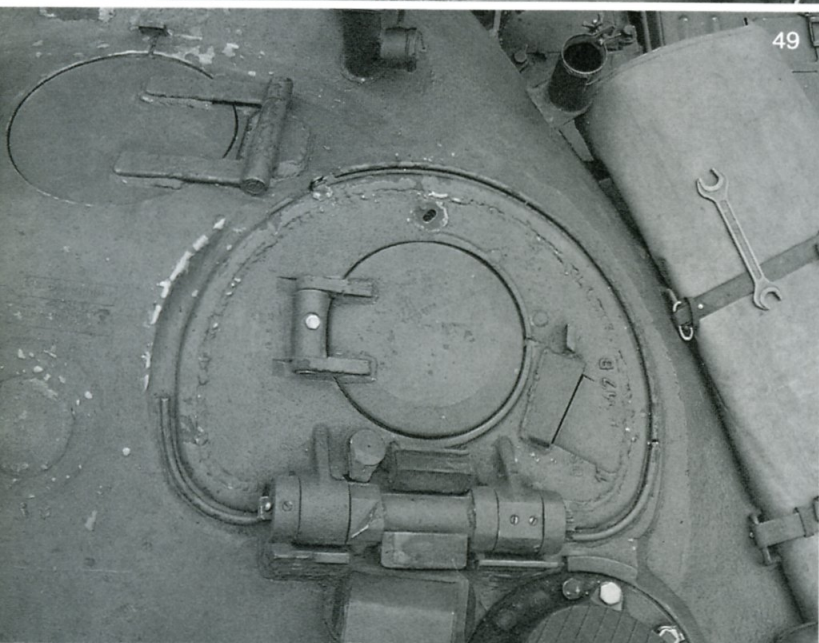
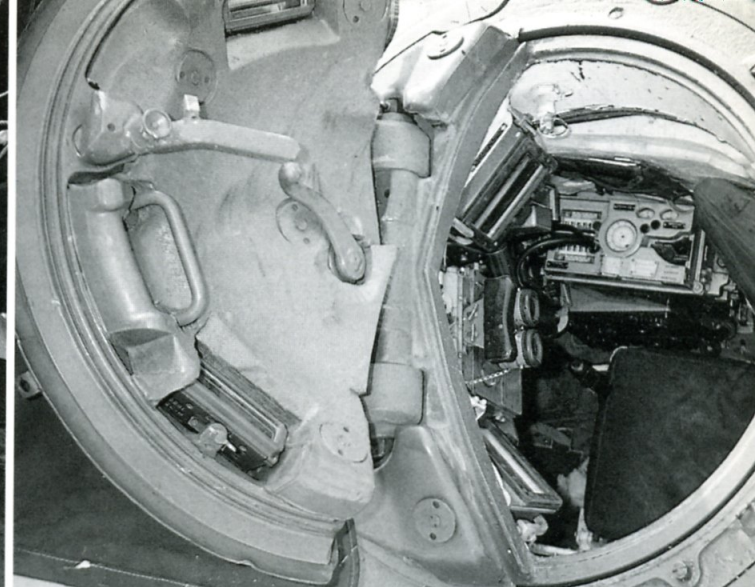
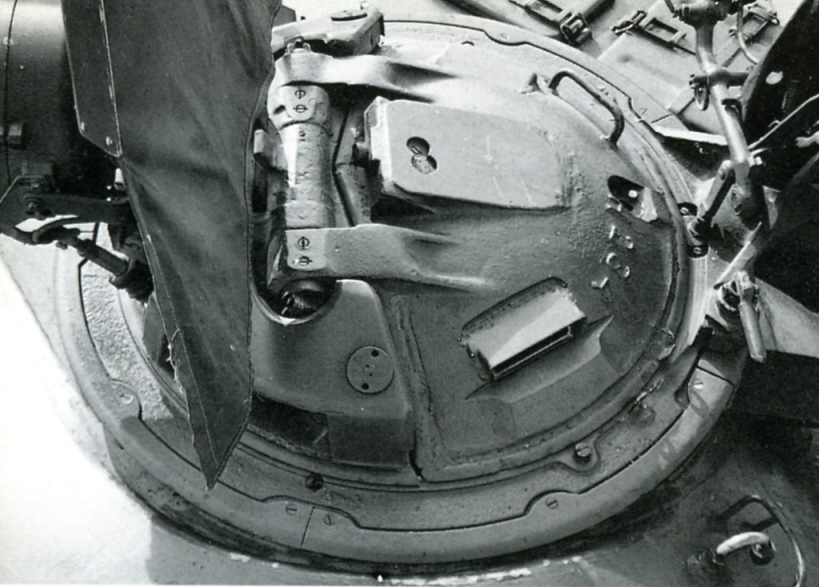


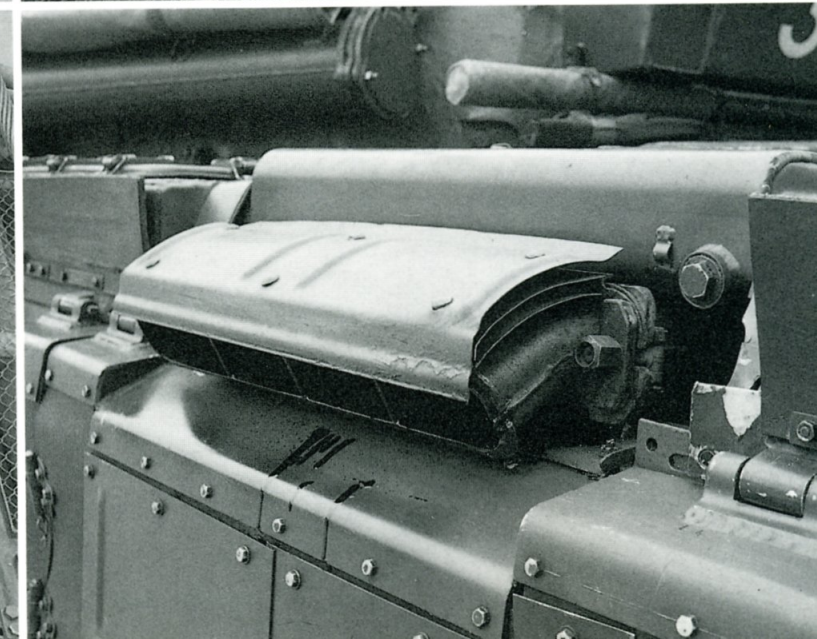
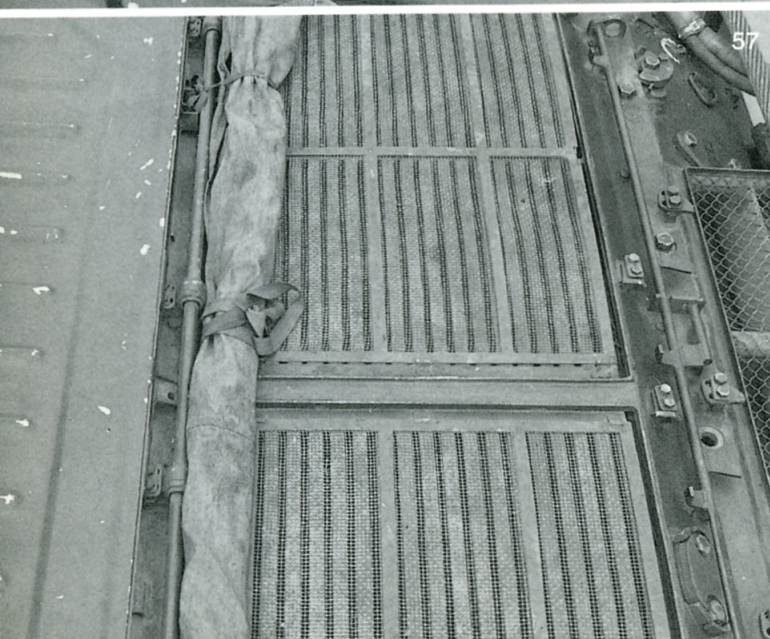
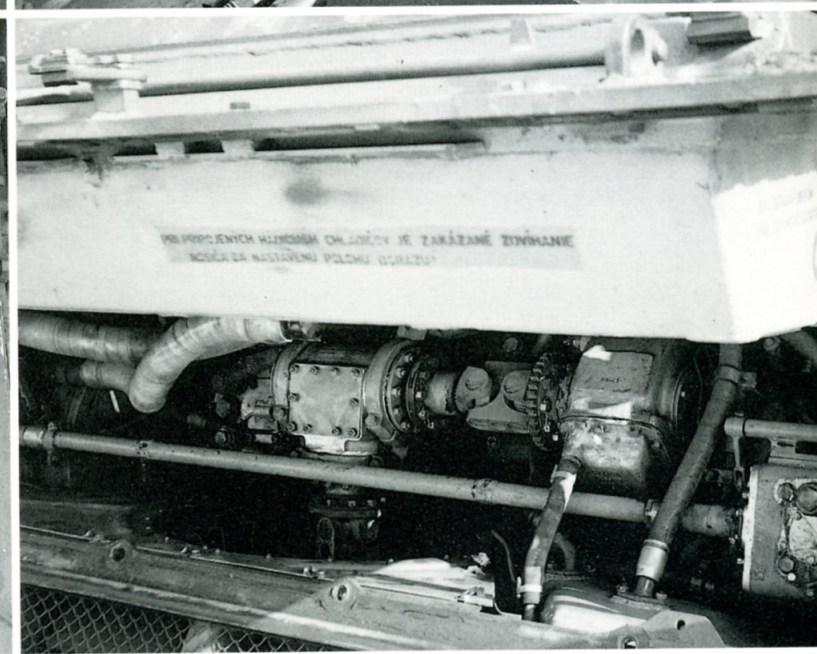
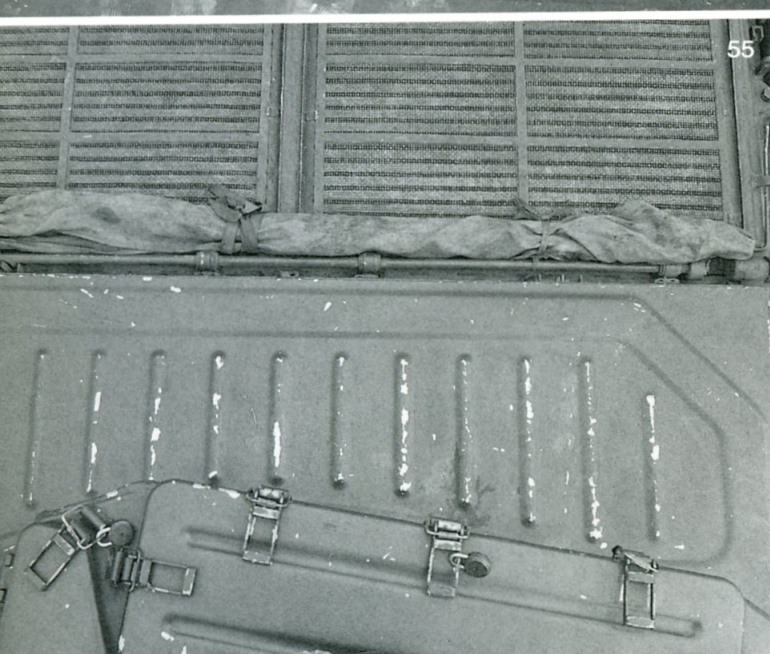
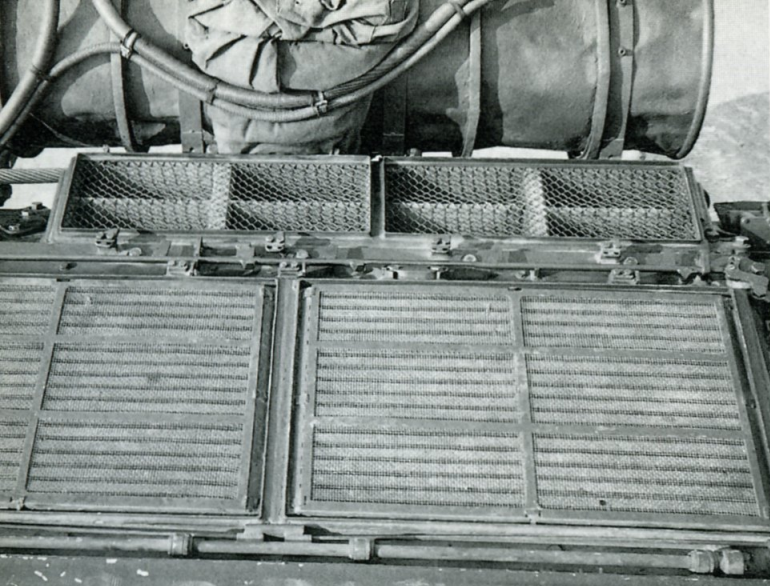
44



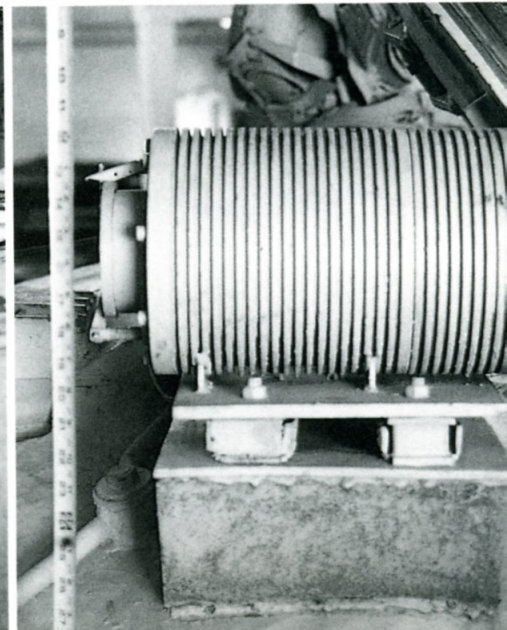
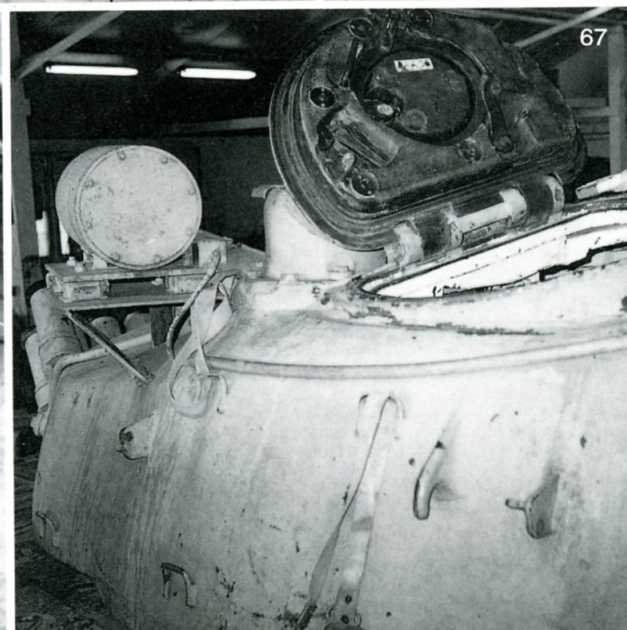
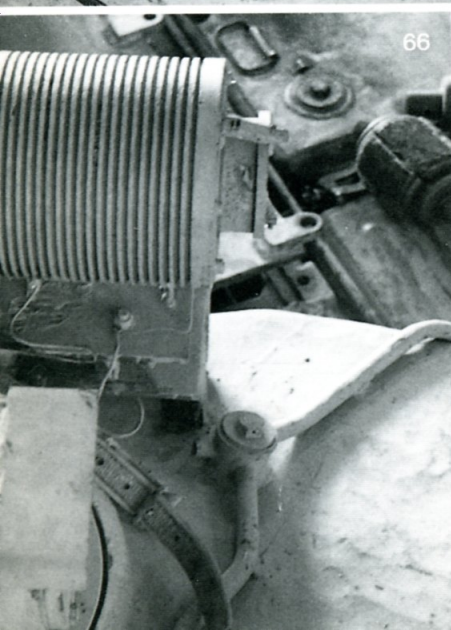
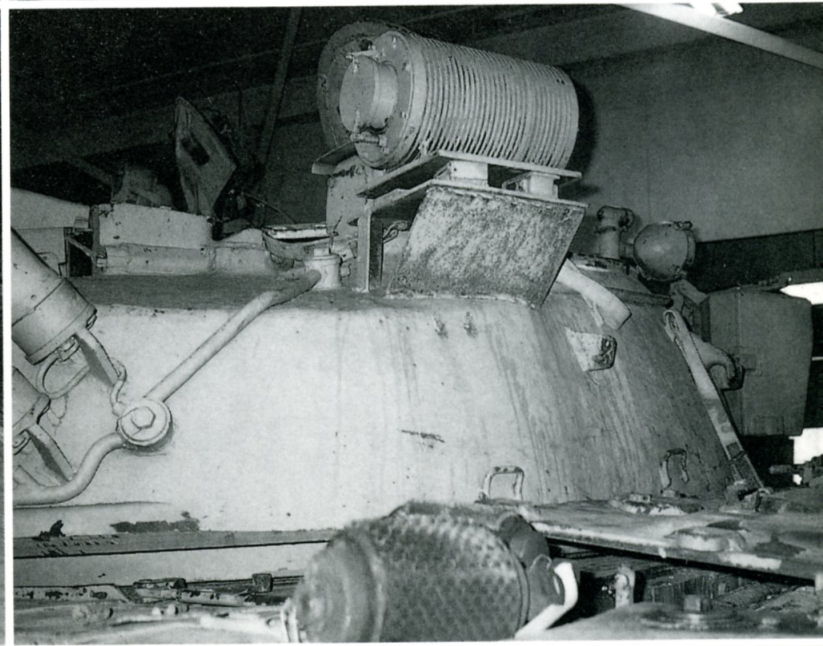
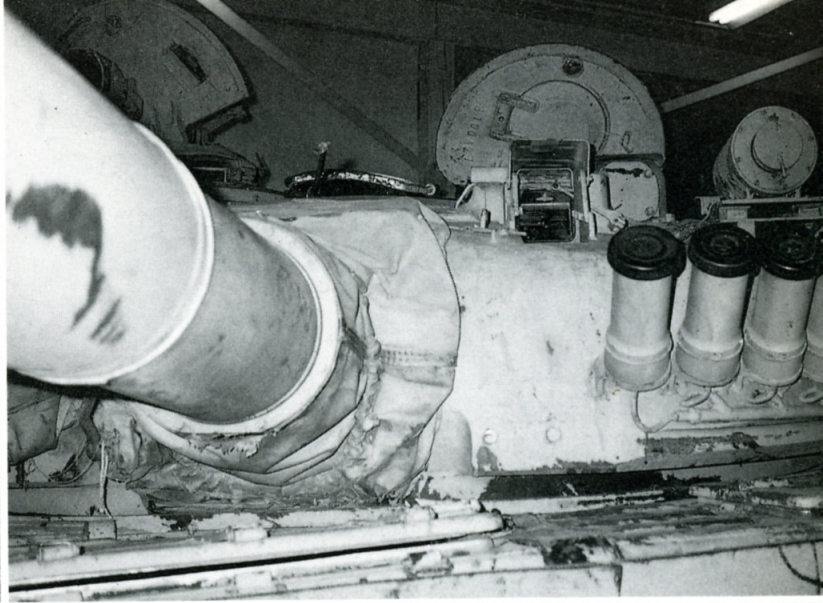
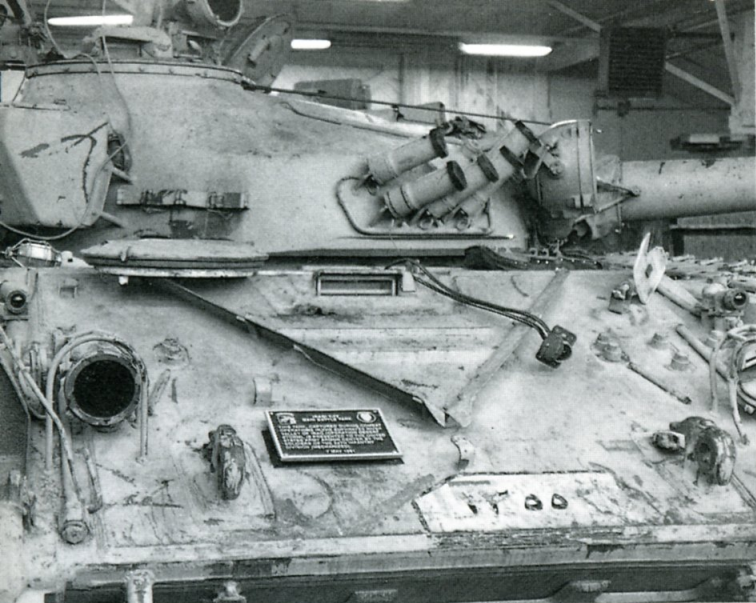
46

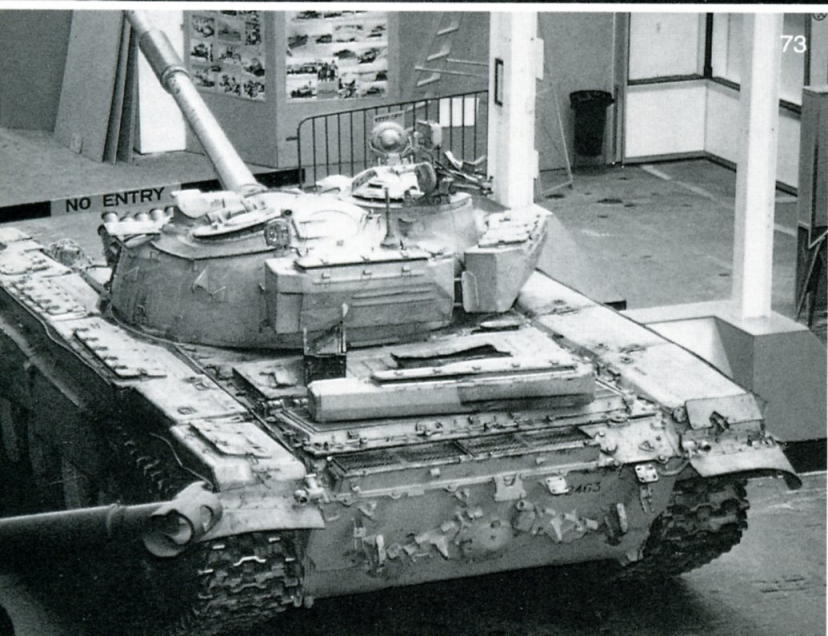
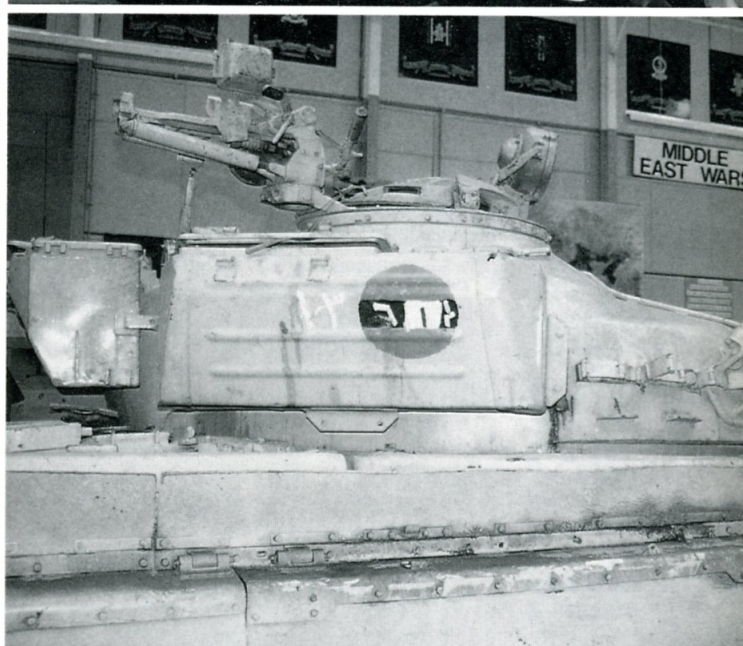
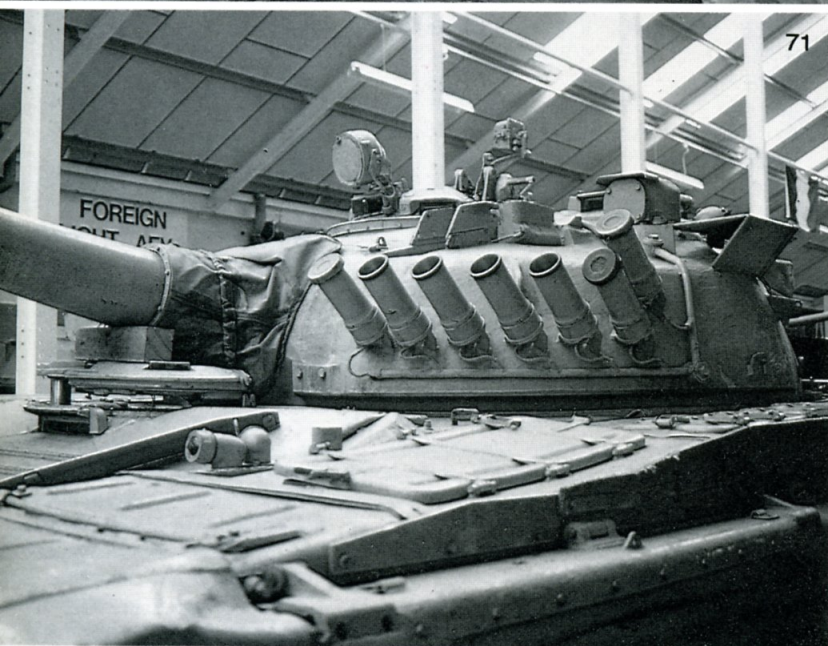














① ソ連親衛戦車連隊のT-72 M1。戦車兵達は暖かそうな服装をしている。この戦車は冬季用の暖房は行き届いていた。だが、夏季用には形ばかりのファンがあるだけで、車内はひどい暑さになったろう。(1989年撮影)

② 同じ親衛戦車連隊のT-72 M1。1個中隊が揃っているようだ。車長用の遮風板を上げている戦車が中隊長車のようだ。主砲の右に何か描かれているが、部隊識別のマークなのだろうか。

③ 同じくソ連親衛戦車連隊のT-72 M1を、別方向から。(1989年撮影)

④ 「フレンドシップ86」前の出動準備中のチェコ軍のT-72M。砲塔番号に3桁目が4と7が入り混じっているが、数からみて、どうも1個中隊のようだ。(1986年撮影)

⑤ チェコ軍のT-72 M1。操縦手のハッチが持ち上げられている。後方に同じくチェコ軍のBMP-1が見える。(1988年撮影)

⑥ 「フレンドシップ86」合同演習におけるソ連軍親衛戦車連隊のT-72 M1。シュノーケルを付けて、一台だけが潜水走行のデモンストレーションをやったのだらう。場所はエルベ河である。(1986年撮影)

⑦ ソ連軍、それも親衛戦車連隊に属するT-72 M1である。架橋渡河演習の一コマのようだ。T-72は通常の状態では、深さ1mまでの水深を走行できる。(1984年撮影)

⑧ これも合同演習の連続写真。エルベ河の架橋渡河訓練の情景である。兵士達は皆、救命具を付けている。

⑨ 同じく合同演習中のソ連軍親衛戦車連隊のT-72 M1。白ベルトの二人の兵士はソ連軍の交通整理担当憲兵である。ヘルメットのPは英語のRにあたり、《Regulation》の頭文字である。

⑩ 「フレンドシップ86」の演習時のT72。非常にコンパクトな砲塔に砲身がアンバランスに見える。

⑪ 完全装備のようだ。主砲の強さと、車高の低さなど、かつてのソ連戦車の特徴を良く表現した写真である。この戦車には車長用対空機関銃が付いていない。

⑫ 実弾射撃演習中のチェコ軍T-72M。このように広角レンズで、この戦車を撮ると、物凄く主砲が強調されて強力な戦車に見える。(1989年撮影)

⑬ かつてのワルシャワ条約機構軍のもう一つの合同演習であった「シールド84」に参加

撮影)

⑭ チェコ軍のT-72M。主砲のサーマル・スリープの留具などが良くわかる。それに砲塔上面に、恐らく溶接跡とおもわれるラインがある。実弾射撃訓練のようで、対空機関銃に弾丸ベルトが付いている。(1986年撮影)

⑮ これも同じT-72戦車743号車。車長展望塔の射手は、対空機関銃の照準「OK!」というポーズをとっている。

⑯ チェコ軍のT-72戦車714号車。743号の僚友かもしれない。チェコ軍の実弾射撃演習の際に撮られた。ただ、この戦車は対空機関銃が付いていない。(1986年撮影)

18



⑰ チェコ軍の、T-72。この戦車は目下、滑腔砲の仰、俯角の照準を調整しているようだ。砲塔基部にハンドレールが付いている。(1986年撮影)

⑱ 鉄道輸送のための貨車積み込み作業であらうか。チェコ軍のT-72Mである。チェコ軍兵士は迷彩服を着ている。デザインは旧東ドイツ軍に類似した灰緑色の地に茶色の細かな針状の模様で、「ニードル・パターン」と呼ばれている。(1988年撮影)

⑲ チェコ軍駐屯地キャンプ内で整備中のT-72M。上から見ると、砲塔は思ったより卵型をしている。エンジンルームの上のパネルが開かれている。やはり主砲の125mm滑腔砲は長大である。フェンダーの形状が通常のものとうようだ。(1986年撮影)

⑳ 同じ戦車のクローズアップ。砲塔上面の溶接跡が明白にわかる。T-72の砲塔の製造方法は一体鋳造工法では無く、恐らく上面を円形に開けた形で鋳造し、後に上部別部品を溶接しているのではないだろうか。

㉑ チェコでライセンス生産されたT-72。チェコの資料によればT-72Mとある。そこで、解説子もこれに習いM型としておく。なお、これから一連の写真(㉑まで)は1992年にチェコで撮影されたものである。また、被写体は同じT-72Mである。

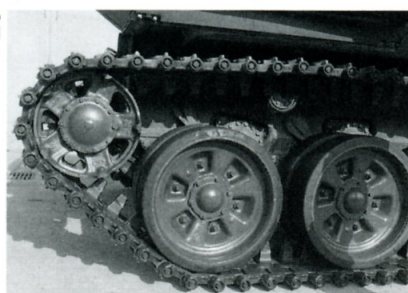
㉒ ドーザー・ブレードを下げている。ブレードの幅は2140mmである。このブレードを使用すると、砂地で15分、普通の土壌で20~40分で、長さ10m程の掩蔽壕(えんぺいごう)を掘ることが出来るという。車体左右角の三角の鋼板は一種の泥よけである。

㉓ 前面のクローズアップ。装甲は複合装甲とデータブックにはあるが、どうも一般的なニッケル・クロム・モリブデン鋼板のよう

T-64と同様な西欧型の緊張履帯となった。一個の履帯は、シングルピン・ワンブロックのゴムブッシュ付で、重量は16.6kgである。第一、第二転輪のトーションバーの油圧ダンパーが見える。

㉔ スカートのめくりのクローズアップ。このスカートの厚さは、人の指とくらべて約15~20mmはありそうだ。フェンダーの後では、二重になっているようである。

27



㉕ 履帯の前部。前部誘導輪は鋳鋼製のようである。前述の履帯の緊張の調整は誘導輪部分を調整する。また、この転輪は6本スポークの後期生産型で材質はアルミ合金である。

㉖ 履帯の後部。旧ソ連軍の特徴は後部変速機・後部起動方式である。十字スポークの鋳鋼製起動輪は単純で頑丈な造りである。又、第六転輪の油圧ダンパーが見える。大転輪のゴムタイヤは演習などで激しく動くトリム部が消耗し、時には完全に失われることもあるという。

㉗ 車体下面。戦車前方より見た底の部分である。ドーザー・ブレードの押出支持棒など機構がわかる。

㉘ 同じく後部の底。これを見ると底部にかなり凹凸がある。また、ダブルの大転輪は内側、外側共に同じ向きのようなだ。

㉙ 砲塔の全景。主砲は弾薬の自動装填装置が付き、砲塔のレイアウトも変わった。車長の展望塔が右側になり、砲手用ハッチが左になった。7本のスモーク・ディスチャージャーがまず目にはいるが、こんなに必要なのだろうか。旧ソ連軍戦車は車体を小さくしたためか、何でも車外に出したようだ。このゴテゴテはモデラーにとっては楽しみなものだ。

㉚ 右側にも5本のスモーク・ディスチャージャーが、頑張っている。その横に2個の対空機関銃用の弾薬箱が付いている。また、開いている砲手用ハッチの下に、砲手の昼間用ベリスコープの窓が見える。

33



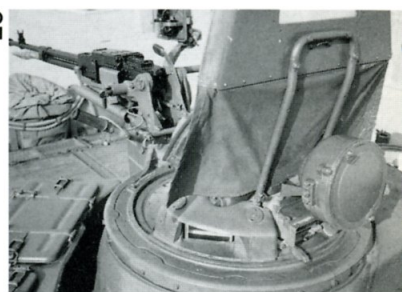
イトで、恐らくFG-125である。その後の窓が4本ボルトでカバーされているのが、手用赤外線監視装置(TPN-1-49-23)の窓である。

㉛ 5本のスモーク・ディスチャージャーカバーの付いた監視用赤外線サーチライト用のリード線が実にゴツイ感じがする。これから砲塔上面の溶接跡に注意。

㉜ 5本のスモーク・ディスチャージャークローズアップ。T-72の場合、ディスチャージャーは全て固定式である。スモーク榴弾は、一発で400m前方付近を約2分間、隠蔽するという。発射は電気式である。

㉝ 監視用赤外線サーチライト。通称は「ルナ」と呼ばれているが、正式にはFG-125。当然、主砲の仰角と俯角には同調する。遅くなったが、その横に描かれた「菱形」の文字は部隊の識別用なのだろうか。

37



㉞ 車長用キューボラ。この展望塔は最上が手動で360度回転する。従って12.7mm対空機関銃(NSVT-12.7)も同調する。上にあるカバー付監視用赤外線サーチライト(G-125)は車長用である。

㉟ 赤外線サーチライトの真下に車長用の監視用赤外線監視装置(TKN-3)の窓がある。また、その左右には車長用の昼間前方監視用ベリスコープの窓が見えるが、これは個付けられている。その後の盾のような物、車長が肉眼または双眼鏡で監視する際の遮板である。これは冬季に有用であらう。

㊱ 写真中央に収納箱が見える。左下にエンジン用の空気取入口のグリルが顔を出している。また、砲塔後部上の色の違った正方形のものは、砲塔の内側から装着した砲弾自動装填装置の上部をカバーするためのものであるだろうか。

㊲ 写真中央が、12.7mm対空機関銃(NSVT-12.7)である。車長用ハッチにもベリスコープ無しの監視窓が付いている。展望塔巡って砲塔の溶接跡が見えるのに注意。

㊳ 正面に見えるのが、潜水走行用のシュノーケル・パイプである。釣り竿式に伸ばし、砲手用ハッチの真中に装着される。この装により、最深で5mまで潜水が可能である。砲手用ハッチの装着孔と防水用のパッキンが良くわかる。

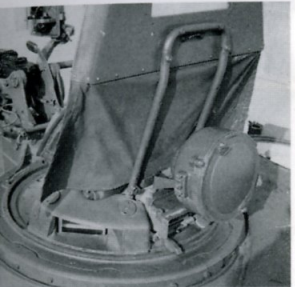
㊴ 砲塔右側のショット。対空機関銃の弾薬箱は、少なくとも一箱で200発は収納できそう

㊵ 12.7mm対空機関銃(NSVT-12.7)

モーク・ディスチャージャーと暗視照準用赤外線サーチライト線が実にゴツイ感じがする。その面の溶接跡に注意。

モーク・ディスチャージャーのプ。T-72の場合、ディスチャージで固定式である。スモーク榴弾0m前方付近を約2分間、隠蔽で発射は電気式である。

用赤外線サーチライト。通称で呼ばれているが、正式にはFG-主砲の仰角と俯角には同調する。その横に描かれた「菱形とU」部隊の識別用なのだろうか。



ューボラ。この展望塔は最上部で回転する。従って12.7mm対空機銃(T-12.7)も同調する。上にある暗視用赤外線サーチライト(F車長用である。

ーチライトの真下に車長用の暗視装置(TKN-3)の窓がある。左右には車長用の昼間前方監視の窓が見えるが、これは2つある。その後の盾のような物は、これは冬に有用であろう。

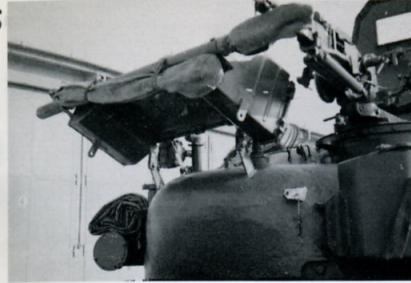
に収納箱が見える。左下にエンジン取入口のグリルが顔を出している。展望塔上部の色の違った正方形は、展望塔の内側から装着した砲弾自動部をカバーするためのものでは

が、12.7mm対空機関銃(NSV)がある。車長用ハッチにもペリスコープの窓が付いている。展望塔を溶接跡が見えるのに注意。

えるのが、潜水走行用のシュノーケルである。釣竿式に伸ばして真中に装着される。この装置で5mまで潜水が可能である。の装着孔と防水用のパッキング

のショット。対空機関銃の弾薬箱一箱で200発は収納できそうだ。対空機関銃(NSVT-12.7)は50cmを越えるほど銃身が長い。発射分、射程限度は2000mで、かなり長い。また、砲身が長い

の着孔と防水用のパッキングのショット。対空機関銃の弾薬箱一箱で200発は収納できそうだ。対空機関銃(NSVT-12.7)は50cmを越えるほど銃身が長い。発射分、射程限度は2000mで、かなり長い。また、砲身が長い



46 砲塔の後部の珍しいショット。砲塔後部の収納箱を上にあげたところ。こうしておいて、ラジエーター・グリルの潜用水密閉カバーを跳ね出すのだから。砲塔の最後部はかなり突き出しているのがわかる。

47 車長用回転展望塔のアップ写真。ハッチ部分にも2つの監視窓がついている。但し、これにはペリスコープは付いていない。

48 車長用回転展望塔の内部。中央に暗視用(写真では左側)、左右に昼間用のペリスコープが見える。右側にはスモーク榴弾発射用のコントロールパネルが見える。これによりスモーク榴弾発射の間隔と砲塔左右の弾の発射順を決める。展望塔の回転は手動で、その回転把は2つ、それぞれ昼間用のペリスコープの真下に付いている。

49 砲手用ハッチ。その真ん中にシュノーケル用のハッチが付いている。その後方には薬筒の排出ハッチがある。125mm砲弾用の薬筒はプラスチック製の半燃焼式で、T-62用の薬筒ほどは大きくはないから、排出は少し楽になっただろう。

50 砲手用ハッチの続き。戦車の左側面を監視するための窓がみえる。ハッチとは関係がないが、その横に見える円形の出っ張りは何のための物だろうか？

51 操縦手用ハッチ。その前に操縦用のメイン・ペリスコープがある。ハッチに2つの昼間監視用窓が付いている。写真左奥に2つのボルトが付いたカバーが並んであるが、その一番奥が車内燃料タンク用の注入孔キャップ、もう一つはタンク内燃料の状況を知るための管のキャップだという。車内燃料タンクは全部で3つあり、操縦席の左右と砲塔後部を半円形に取囲んで、エンジン・ルームの前にある。

52 同じく操縦手用ハッチ。持ち上げるのはかなり重そうである。それから前面装甲板にある反跳弾防止用のリブが見える。これは単に鋼製の棒を溶接しただけのようだ。

53 車体後部のラジエーター・グリルと、後にラジエーター用排気ルーバーが見える。排気ルーバーには潜用水の密閉ハッチ(2組)が外されている。

54 ラジエーターを点検のために持ち上げたところ。持ち上げるのは手動かな？自動か？

ーファンがある。また、オイル及び冷却水用のパイプが見える。

57 左の砲塔後ろのパネルの下には、ラジエーター・グリルの潜用水密閉カバーが収納されている。操縦手は必要に応じて座席の右にあるレバーを引き、座席にしながらパネルを上げ、密閉カバーを跳ね出して付けることが出来るという。また、パネルの下にはエンジンが横向きに鎮座している。

58 エンジンの排気口。排気の当たるスカート部分は鋼製である。排気口の奥には予備オイル・タンクがある。スカートが上にも付いている。また、取付けヒンジが良くわかる。

59 後部の写真。まず、2個の補助タンク、その上にはカバー・シート、その下に泥濘地脱出用の丸太、それに砲手用ハッチの後にある赤色の位置表示灯がクッキリ見える。

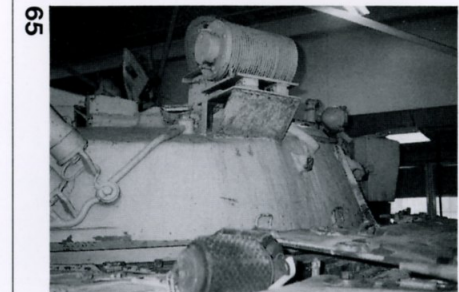
60 容量が200リッターの補助タンク。一般に、わが国ではドラム缶をJISで決め、その中に200リッターの物がある。これはアメリカの55ガロン缶に相当する。旧ソ連でも同じなのだろうか。燃料を車内タンクに移すパイプが剥き出しで面白い。

61 脱出用の丸太が鉄の留金で付けられている。直径が20cm程度の丸太のようだ。ゴム製のスカートの端がフェンダーをぐるりと覆っている。

62 これから7枚の写真はフォート・ノックス・キャンプの「パットン・戦車博物館」にある湾岸戦争で鹵獲したイラク軍のT-72。見たところM1型のようだ。当時、米軍はかなりの数のT-72を捕獲したという。装甲板には鹵獲した時の状況やT-72の説明が書かれている。また、その下のアラビア文字は12552と描かれている。

63 このT-72は、外観からではどこも破損していないようだ。恐らく、戦車の主は降伏したか、戦わずに戦車を放棄したのだから。砲手用の赤外線サーチライトは最初から無かったようだ。

64 モデラーには中東の砂漠地帯でのモデルのウェザリングの見本になりそうだ。重ねて記すが、砲塔上面の溶接跡が良くわかる。



65 イラク軍の特徴の一つは、この「ダズラー」(目つぶし)と呼ばれるミサイル妨害装置らしい。手前にエンジンのオイル・クリーナーが見える。

66 ミサイル妨害装置は、見る通り、放熱用の冷却フィンで覆われている。赤外線パルス(駆動)を放射して、米軍の戦車ミサイル

67 これからの6枚の写真は、イギリス・ボービントン戦車博物館のT-72である。湾岸戦争では、英軍はT-72戦車と遭遇しなかったため、米軍が鹵獲した一台を譲り受けて展示している。

68 イラク仕様のT-72M。かなり破損しており、V字型のスプラッシュ・ボード(水切板)の前部が外れている。

69 全体がサンド・イエローに見事に塗装されている。スモーク・ディスチャージャーのキャップだけが黒いのも面白い。「ダズラー」は取外されている。



70 砲塔側面に中隊マークか、個人のマークが描かれている。湾岸戦争当時、イラク軍にはT-72の他、T-54/55、T-62、それに中国製の59型、59II型それにクエート軍から鹵獲したチーフテンとAMX-30などのさまざまな戦車が混在していた。

71 後方からの写真。右のフェンダー上には5個の燃料タンク。左はオイル・タンクの他は全て収納箱である。後方から見ると、当然のことながらT-62に似ている。

72 後部のクローズ・アップ。さっぱりした後部の左右に、きちんと2つのテール・ランプが付いている。

《表紙写真》 「フレンドシップ86」演習時のチェコ軍のT-72M。低姿勢であることがよくわかる。(表紙写真上)

ワルシャワ条約機構軍の合同演習、「シールド84」時のチェコ軍のT-72M。フロントフェンダーが変更されており、オリジナルと異なっている。(表紙写真下)

《裏表紙写真》 「フレンドシップ86」演習時のチェコ軍T-72M。(裏表紙写真上)

かつてのワルシャワ条約機構軍の合同演習であった「フレンドシップ86」の写真。全てチェコスロバキア(チェコ)軍の戦車である。一列が1個中隊(10輛)であろう。殆どがT-72Mのようだが、架橋戦車や戦車回収車も含まれている。恐らく1個大隊が勢揃いしているのであろう。(1986年撮影)(表紙写真下)

ここでお断りしておくが、T72の型式分類については、NATOの分類を始め、更に細分化させた分類など多々ある。しかし、ここでは出来るだけ簡単にした。特に旧ソ連の輸出型をG型と呼称しないことにした。

《解説子の独り言》

解説子は、元東ドイツ軍機械化歩兵部隊の

いた国だ。また、最近ドイツへ行った人の話では、旧東ドイツ軍のT-72がゴロゴロしているとも聞いているからだ。ちょっと計算してみると、当時、10個戦車連隊はあったわけで、約千台の戦車があったことになる。また、東ドイツ軍兵士は主砲の自動装填を嫌っていたとも洩らしている。こう見ると彼のT-55の話は真実味をおびてくる。

解説子は、久しぶりに旧ソ連軍のT-72戦車を詳しく分析してみた。そこで、判ったことは、T-72はソ連軍戦車の伝統をかたくなに踏襲した戦車であるということであった。

圧倒的な数で凌駕し、機動力と火力で敵を殲滅するという戦術に適合した戦車である。これは、まさに現代版モンゴル騎馬軍団の再現にうってつけの戦車であるということだ。

T-72の特徴を見よう。エンジンはT-34以来のV-12の改良型だが、小転輪を持つ緊張履帯にしたことで、エンジンの低馬力を補い機動性を高めている。主砲の125mm滑腔砲の性能は、いろいろ言われるほど低いものではない。問題は弾薬の自動装填である。解説でも記したが、T-62より小さな砲塔内に、よくも強力な滑腔砲と大胆な構造の装置を組込んだものだ！これには拍手を送りたい。だが、反面、小さな砲塔内には車長と砲手それに装填装置の他に何も置けなくなった。弾薬は床下、砲塔の周りは3つの燃料タンクだ。車内に入らない物は外に出す。その結果、オイルタンクと5つの燃料タンク、更に機銃弾まで車外にある。別の見方をすれば、この戦車は低い製造価格と、これ以上は小型に出来ない限界に挑戦した戦車である。

とはいえ、T-72はそれだけ乗員に犠牲を強いている。現代戦車のNBC対策、即ち対放射能、細菌それに毒ガス対策である。解説子が、かつて専門にしていた放射能除去の点から見ると、この戦車は問題が多い。車体の凹凸と外部にあまりにも物がありすぎるからだ。これらを洗浄(除染)し、放射能を除去することは極めて困難である。これは残りの2つについても同様である。ここで、表面がノッペリした米軍のM1戦車の姿を思い出していたら良い。M1戦車は、この3点について充分に対策が施されているのである。

問題はまだまだある。不幸にも被弾した場合である。乗員が脱出する時間はあるだろうか。どこに当たっても、一発で致命傷となるだろう。好運にそうならない場合でも、自動装填装置は被弾の衝撃で使えなくなるだろう。これは小さな車体の宿命なのである。

湾岸戦争で、M1戦車の120mm滑腔砲弾がT-72の正面に命中し、車体を完全に貫き後方へ飛び去ったという話や、一発でT-72が爆発した話等々があるが、多少の誇張があるにしても、事実あり得たと思われる。

文頭で記したように旧東ドイツ軍がT-72よりT-55の方を好んだという理由が判るような気がする。また、第三世界の国の中にはT-62やT-72よりもT-55の援助を希望したという話もある。

T-72は、その長所が短所であり、



TAMIYA

タミヤニュース資料写真集-12
旧ソビエト・T72戦車
編集・タミヤニュース編集室

TAMIYA PLASTIC MODEL CO.
3-7, ONDAWARA, SHIZUOKA-CITY, JAPAN
TELEPHONE 054-286-5105

発行●株式会社田宮模型
静岡市恩田原3-7 千422
定価●350円

4 950344 641819

